
令和6年度共通教育 活動報告書

P

I 「共通教育実施委員会」活動の総括

1

II カリキュラム等編成部会

4

III 自己点検・自己評価部会

5

IV FD部会

6

V 広報部会

8

VI 分科会報告

1	大学基礎論分科会	10
2	学問基礎論分科会	14
3	課題探求実践セミナー分科会	17
4	国際コミュニケーション科目分科会	18
5	日本語・日本事情分科会	35
6	医療・健康・スポーツ分科会	38
7	キャリア形成分科会	42
8	芸術分科会	43
9	人文科学系領域分科会	47
10	生活・社会科学系領域分科会	52
11	自然科学系領域分科会	53
12	複合領域分科会	55

I 令和6年度「共通教育実施委員会」活動の総括

2025年3月26日

共通教育実施委員会

1. 共通教育実施委員会および常任会議

本年度は、新型コロナウイルスの影響も和らぎ、コロナ前の頃の活発な活動ができるようになり、FD 活動なども盛んに行われるようになった。さらにオンラインによる FD やアンケートなどの実施も定着し、より効率的・効果的な運営が行えるようになった。

本年度は、以下の2項目を重点事項とした。

- 共通教育の新担当カリキュラムの実施
- 共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取組

それぞれの重点事項に関する成果は以下の通りである。

今年度からの共通教育新カリキュラムに関しては、昨年度までの議論や決定を踏まえ、授業の実施を行った。結果、大きな問題なく実施することができた。担当教員や事務の方々には篤く御礼申し上げる。

共通教育における共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取り組みについては、シラバスチェックが4年目となり、自己点検評価部会によって体制が整備され、シラバスにおける授業内容や評価基準をよりわかりやすく、明確に、学生に提示できるようになった。新年度からはシラバスの様式も変更されるため、新たな様式に沿ったシラバス執筆について、チェックを行った。

2. 部会活動

本委員会では、これまで「カリキュラム等編成部会」、「自己点検・自己評価部会」、「FD 部会」、「広報部会」の4部会において、それぞれの領域における委員会全体の取りまとめや分科会活動への支援を行ってきており、今年度もこの方式を継続した。以下、各部会の取り組みの要点のみ、略記する(詳細は各部会の報告を参照)。

カリキュラム等編成部会では、新カリキュラムによる編成を3回の部会開催を通じて順調に進め、新カリキュラムに沿った授業題目表を作成することができた。

自己点検・自己評価部会では、「e-ポートフォリオ」を活用した授業評価アンケートの実施を依頼した。またシラバスに関し、各分科会でチェックをピアレビュー等を使って行うシステムを構築し、実施した。

FD部会では、人文科学系領域分科会、国際コミュニケーション科目分科会、医療・健康・スポーツ分科会・キャリア形成分科会においてFDが行われた。またFD・SDウィークでは6科目で授業参観が行われた。上記の通り、新型コロナウイルスの影響も和らぎ、活発な活動が行われた。

広報部会では、『パイプライン』第64号を発行した。今年度から年に1回の発行となったが、その分、充実した内容にすることができた。また、サイトのアクセス数などから、読まれ方の分析を行った。

3. 分科会活動

本委員会における分科会活動は、これまで「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んできた。以下、各分科会で取り組まれた活動について、それぞれの項目ごとの概要は以下の通りである(詳細については各分科会の報告を参照)。

(1) カリキュラム編成の取り組みについては、分科会ごとの個別の報告に譲るが、どの分科会も問題なく編成することができた。

(2) 各分科会の取組は、以下の通りであった。

大学基礎論分科会では、各学部で、担当教員間での話し合いや情報交換、授業アンケートの分析、FDが行われた。また KULAS によって全学的な授業評価アンケートを行った。

学問基礎論分科会では、各学部においてアンケート調査が活発に行われ、e-ポートフォリオなどにより、オンラインでの授業実施を含めたさまざまな分析が行われた。

課題探求実践セミナー分科会では、授業改善アンケートを実施し、集計・分析を行った。

国際コミュニケーション科目分科会は、2回のFD講演会を開催した。また前期・後期の試験期間終了後に受講生による授業評価アンケートを実施した。

日本語・日本事情分科会では、自己点検評価・FD活動を実施するとともに、FD研修に参加した。

医療・健康・スポーツ分科会では、講義科目である「健康」において、授業評価アンケートを実施した。またFD活動では、Teamsを活用したスポーツ実技のリアルタイム・フィードバックのシステム構築について検討が行われた。

キャリア形成分科会では、全学のキャリア形成に関する動向を把握することに務め、またシラバスチェックを行った。

芸術分科会では、授業担当教員へのアンケート調査を行い、より効果的な授業実施について検討を行った。

人文科学系領域分科会では、「図書を活用した教材開発」というFD活動を実施し、アンケート調査の実施、共有を行った。

生活・社会科学系領域社会分野分科会では、独自のFDやアンケート等は行わず、他分科会のFDなどに参加するほか、カリキュラムについての検討を行った。

自然科学系領域分科会では、新カリキュラムに沿って新たにカリキュラム編成を行い、

新規開講科目の立ち上げを行った。

複合領域分科会では、教員による研修への参加を行い、また各種セミナーへの参加を行った。

4. その他

(1) 『令和5年度共通教育実施委員会活動報告書』は、4月中に発刊し、WEB上で公開する。

(2) 委員が交代する場合には、次年度の課題に対する検討も含め、引き継ぎをお願いしたい。

Ⅱ カリキュラム等編成部会

カリキュラム等編成部会長 大櫛敦弘（人文社会科学部）

1. カリキュラム等編成活動の経過

2024年7月11日 第1回カリキュラム等編成部会（オンライン）

主管臨席のもと開催された。共通教育授業担当体制の決定方法について説明を行った後、令和7年度共通教育授業担当体制について原案どおり了承され、各分科会へ提示することが決定した。

2024年10月10日 第2回カリキュラム等編成部会（オンライン）

前回の部会で担当体制案が了承された後、各分科会からの編成状況の報告、説明がなされた。そのうち医療・健康・スポーツ分科会より提出された開講科目数の削減について、「原則として開講科目数は維持してゆきたいが、現状を踏まえ、本部会としては令和7年度については、分科会から提出された科目数を了承し、令和8年度以降については、令和7年度の状態を見て判断することとしたい」との説明があり、それもあわせて令和7年度共通教育授業担当体制が了承された。そこで各分科会長に対して、令和7年度共通教育授業題目表の作成を依頼した。また令和6年度共通教育2学期開講科目の変更点、および機構・センター等所属教員の令和7年度共通教育授業担当依頼について報告がなされた。

2025年1月20日 第3回カリキュラム等編成部会（オンライン）

令和7年度の共通教育授業題目表を確定させた。また、機構・センター等所属教員による新規科目の確認を行った。

2. 令和7年度カリキュラム等編成活動の総括

次年度に向けたカリキュラム編成は、全体的にほぼ順調に進めることができた。編成作業に当たられた各分科会長をはじめ、各学部・機構・センター所属教員、共通教育係など関係者にあらためて謝意を表したい。

新カリキュラムも、基本的に定着しつつあると見てよいであろう。ただし、担当教員の減少という状況は変わっているわけではなく、それによりどの分野においても退職、転出による影響などが相対的に大きくなるリスクが想定されるのであり、そのような場合の分科会と本部会、共通教育係の密接な連携、柔軟な対応が求められる。またこのことにも関連して、たとえば緊急避難的に非常勤講師を採用しようとしても、本務先の事情などで報酬を受け取れないためにせつかくの適任者をすんなりと雇用できない場合などもあるとのことで、円滑で安定したカリキュラム編成のためにも、これらの課題を解決してゆく方途を粘り強く模索してゆくことが必要とされるであろう。

Ⅲ 自己点検・自己評価部会

自己点検・自己評価部会 部会長 杉田 郁代

令和6年度活動の概要

本部会は、授業評価アンケート（Reflective モニタリングを含む）実施の促進を行う。また、各分科会と連携協力して、次年度のシラバス点検を行う。

1. 活動報告

1.1 授業評価アンケートの実施について

本部会では、学期ごとに授業5週目、15週目が近づくと、学務課共通教育係を通じて、授業評価アンケートの実施を授業担当者へ依頼する。授業評価アンケートを実施する目的は、各授業担当者の授業改善につなげることである。本部会は、教員の授業改善に向けて、授業評価アンケート実施の促進を行う。

授業評価アンケートの実施方法は複数ある。授業評価アンケート授業形態の特性等に応じて授業担当教員が選択することができる。令和6年度の実施方法は、共通教育の授業科目においてe-ポートフォリオを用いて実施された授業評価アンケートは、84科目（1学期：46科目、2学期：38科目）であった。また、教務情報システムKULASを通じた授業評価アンケートは、実施されなかった。これはKULASのアンケート機能がなくなったことが要因と考えられる。各分科会主導や授業担当者個人による授業評価アンケートも実施されている。

1.2 共通教育科目のシラバス点検について

共通教育科目におけるシラバス点検は、授業担当教員が入力したシラバスを各分科会の連携と協力のもと実施する。本年度の活動は、令和7年1月17日（金）に、第1回 共通教育実施委員会 自己点検・自己評価部会を開催し、令和7年度共通教育科目におけるシラバス点検に向けて審議を行った。

シラバス点検のスケジュールは、授業担当教員が入力したシラバスを確認期間開始日（令和7年2月26日（水））に共通教育かかりから自己点検・自己評価担当教員に送付され開始される。次に、分科会構成員によるピアレビューを実施する。修正が必要な科目については、授業担当教員にシラバス修正を依頼する。その後、修正確認期間に最終点検を行い、修正が行われていない場合は、再度依頼を行う。シラバス点検は、この依頼をもって点検は完了する。

シラバス点検は、学生に公開される前に、各分科会と部会教員が連携し、複数の教員による確認を行う。この点検は、シラバス公開前日までに完了させる必要がある。本部会は1カ月という短期間で、全共通教育科目のシラバス点検を進める。

最後に、本年度も公開日までに各分科会と学務課共通教育係で円滑に作業が進められ無事に点検を終えることができた。この場を借りて、各分科会、自己点検・自己評価部会担当教員、学務課共通教育係の皆様へ感謝申し上げます。

IV FD部会

部会長 波多野 慎悟

今年度、各部会から報告があったFD活動を紹介します。

<人文科学系領域分科会>

・図書を活用して教材開発を行うなど授業改善に取り組んだ。その後、2月下旬に教材開発の工夫やシラバス改善に関するアンケートをおこない、その結果を分科会で共有することで、振り返りと紙上情報交換会を実施した。

・芸術分野(音楽・美術)で芸術分野における講義・演習形式の授業状況」のアンケート調査をおこない、調査結果の共有と紙上情報交換会を開催し、効果的な授業方法など自己の授業改善を図った。

<国際コミュニケーション科目分科会>

・2024年9月10日に、FD講演会：オンライン授業が一部常態化するなかで、語学の教科書はどのように対応、変化してきているかという論点で、柏倉健介講師(郁文堂取締役)を招聘し、講演「大学における語学教科書の傾向と未来」を開催した。当日は高知大学で外国語教育に携わる専任講師ならびに非常勤講師のうちで10名程が出席し、質疑応答が繰り返された。また郁文堂の教科書・参考書を参照しながら、どのような語学授業のあり方が好ましいか、参加者全員で意見交換をした。

・2024年9月23日に、ドイツ政府文化機関 Goethe Intitut と日本独文学会の共同主催のドイツ語教員養成課程修了者を対象とした語学教育に関する講演ならびに勉強会に分科会所属教員が参加し、他の研究機関や大学で語学授業に係る研究者や教員とともに議論や情報共有をした。

・2025年3月6日に、FDワークショップ：大学における外国語授業において非常勤講師がどのような問題を抱えているのか、あるいは非常勤講師からみた語学教育の可能性について、前田織絵講師(名古屋大学非常勤講師)をオブザーバーとして招聘し、「大学教育における非常勤講師の役割と現状」を開催した。他の授業科目のなかでも今後ますます非常勤講師への負担が増えていくと思われる語学授業において、専任との間で問題を共有する機会を作ることが重要であることが再確認された。

<医療・健康・スポーツ分科会>

・2025年1月16日に、スポーツ科学実技で開講されているバスケットボール(幸篤武准教授)の授業を題材とし、幸篤武先生(授業担当)、宮本隆信先生、神門大輔(FD担当)の3人で、ボール競技における各個人の動きやチームの戦術などのリアルタイム・フィードバック

クのシステム構築について検討した。今回のFD研修では、リアルタイム・フィードバックのシステム構築の可能性をさらに広げる成果を得ることができた。今後も技術的な改善を進め、授業環境のさらなる充実を目指す。

<キャリア形成分科会>

・SBI (Society Based Internship) にて、2024年10月7日に3名の教員と1名の外部講師で受講生のセミナーレポート、実習日誌やアンケート回答をもとに、授業の総括・振り返りを行った。その後、10月21日に受け入れ企業の経営者達と意見交換会を実施し、実習中の学生や学生指導社員の様子や、感想・要望などを聞いた。

<その他>

・2学期のFD・SDウィークにて、6つの科目で授業参観が行われた。

V 広報部会

部会長 山崎聡

1 本年度広報部会の構成委員

部会長：山崎聡（教育学部）

渡邊ひとみ（人文社会科学部）、小野寺栄治（理工学部）、大坂京子（医学部）、筈平裕次（農林海洋科学部）、松本明（地域協働学部）

2 本年度部会の活動方針

広報誌『パイプライン』の発行（年1回）、電子化された『パイプライン』の読まれ方に関する調査を行う。

3 本年度部会の活動報告

3-1) 概要

広報部会活動計画についてメール会議を開催した。

電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、当該ウェブサイトへのアクセス数を確認し、分析検討した。

『パイプライン』第64号を3月に発行した。

3-2) 部会議事と関連会議事項

- ・第1回部会（メール会議：令和6年10月10日）：議題『パイプライン』第64号発刊計画および令和6年度活動計画について
- ・パイプライン発行にあたって、64号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。
- ・今年度の活動計画と予算案について諮り、承認された。
- ・特集は、新体制に伴い、「再編共通教育」とした。

3-3) 本年度の審議内容の概要

3-3-1) 『パイプライン』発行業務の自己点検・評価について

- ・例年どおり、『パイプライン』の読まれ方に関して、当該ウェブサイトへのアクセス数の調査を実施した。
- ・今年度も昨年度に引き続いて、発行のアナウンスを、グループウェア、KULAS、Facebookおよび学生掲示板を通じて行い、より多くの人々に周知するよう努めた。

3-3-2) 『パイプライン』の編集・発行について

- ・第64号を令和7年3月にHPに掲載した。
- ・特集は「再編共通教育」であった。

新体制下の各分科会長から執筆いただいた。

事務方にも執筆いただいた。

4 次年度（以降）の課題

- ・ 共通教育新体制に伴い、『パイプライン』の編集も刷新されることとなった。これまでの年 2 回発行から 1 回発行へと方針を変え、より充実した密度の濃いコンテンツとしていくことが望まれる。
- ・ 引き続いて、『パイプライン』に原稿執筆することの意義を再確認・周知するとともに、意欲的に執筆できるような編集内容（構成）へと高めていきたい。
- ・ アクセス数増加のための手段については、依然、検討対象となっている。
- ・ 共通教育の現体制は令和 5 年度一杯をもって廃止となり、令和 6 年度以降は新体制に移行した。新体制下で各分科会が再編されることに伴い、新しい編集方針についても各方面からの意見を参考に、より適切かつ柔軟に構想していく予定である。

VI 分科会報告

1 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 鈴木保志（農林海洋科学部）

本科目の授業形式や教員の担当方式等は各学部で決定し、実施しているが、共通する目標は以下の3項目である。

- ① 大学で学ぶことの意義と目的について考え、「教わる」から「学びとる」へ学びの姿勢を転換する。
- ② 卒業時に自分がどうなっていたいか、どのような能力をつけるべきかを考える。
- ③ 社会における大学や学問の位置づけ、高知における高知大学の存在意義について考える。

これら3項目について考える作業を講義やグループワークで行うことによって、コミュニケーション能力の向上、議論の進行方法及び合意形成手法の修得を図る。これを受けて、大学基礎論の教育目標が達成されるようカリキュラム編成を進めると共に、必要に応じて授業改善に向けた自己点検・評価活動、並びにFD活動を実施した。

1. カリキュラム編成

昨年度から講義は完全に対面形式で実施されている。さらに、過年度以来、moodleによる非同期型オンライン形式の講義や授業時間外の活動を想定したMicrosoft teamsを活用した共同作業も適宜取り入れられている。アカデミックライティング等では共通のコンテンツも活用できるようになった。これらを踏まえ、次年度における各講義の内容について検討を行った。各講義の配置に至った各学部の経緯、担当教育母体の意思等を確認し、ほぼ例年通りのカリキュラム案が了承された。

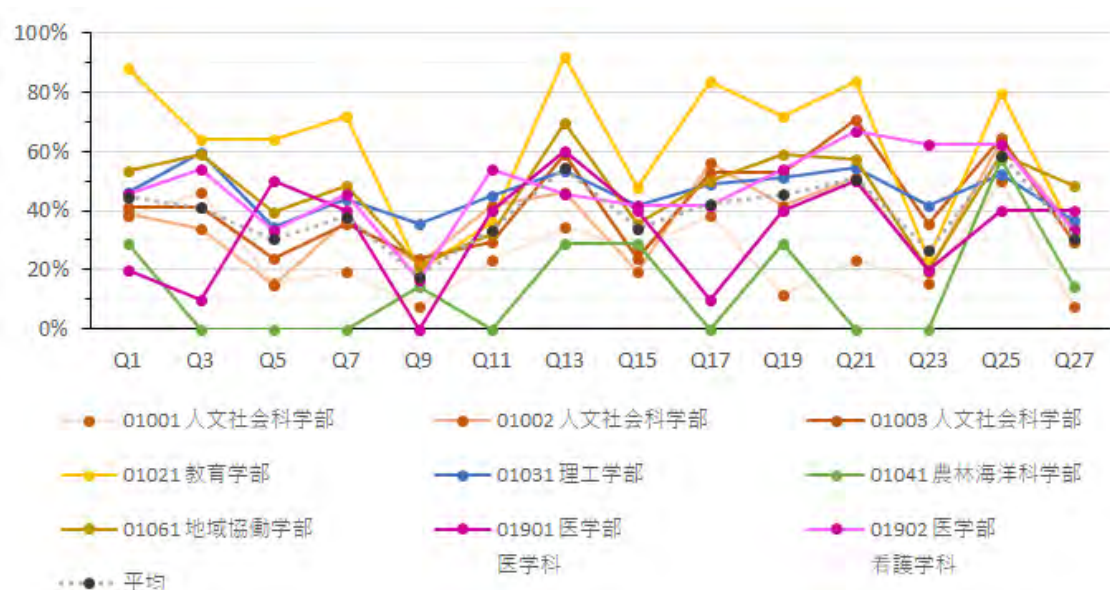
2. 自己点検評価活動

令和4年度は、本学の新型コロナウイルス感染症対策に従い、一部の講義でオンライン講義が実施され、レポートや課題提出状況によって評価される場合もあった。これに対し昨年度（令和5年度）からは、コロナ禍前と同様、大学基礎論はグループワーク等の演習を対面形式で実施するようになっている。

今年度も昨年度と同様にKULASのWEBアンケートを活用して授業アンケートを実施した（第15週目7月25日（木）～7月31日（水）に実施）。授業目標に関する8つの質問に対して、「はい」、「どちらかというとはい」、「どちらともいえない」、「どちらかというといいえ」、「いいえ」の5段階で回答を求めた結果、「はい」という最も肯定的な回答をした回答者の割合を以下の表および図に示す（設問の詳細については表の方を参照）。

表：大学基礎論の授業目標に対して、「はい」と回答した回答率（％）

コード	01001	01002	01003	01021	01031	01041	01061	01901	01902		
学部	人文社会 科学部	人文社会 科学部	人文社会 科学部	教育学部	理工学部	農林海洋 科学部	地域協働 学部	医学部 医学科	医学部 看護学科	平均	変動係数 (%)
受講生数	104	97	111	137	271	211	65	110	60	129.6	53.3
回答者数	26	41	17	25	84	7	56	10	24	32.2	76.4
回答者数の受講生に対する割合	25%	42%	15%	18%	31%	3%	86%	9%	40%	30%	82.7
Q1：授業を通じ「大学で学ぶことの意義と目的について考える」ことができましたか。	38.5%	39.0%	41.2%	88.0%	46.4%	28.6%	53.6%	20.0%	45.8%	44.6%	42.8
Q3：「教わる」から「学びとる」へ学びの姿勢を転換することの重要性を認識する」ことができましたか。	46.2%	34.1%	41.2%	64.0%	59.5%	0.0%	58.9%	10.0%	54.2%	40.9%	55.2
Q5：「卒業時又は卒業後の自分の将来像について意識する」ことができましたか。	15.4%	14.6%	23.5%	64.0%	34.5%	0.0%	39.3%	50.0%	33.3%	30.5%	64.1
Q7：「卒業時にどのような能力をつけておくべきか考える」ことができましたか。	19.2%	36.6%	35.3%	72.0%	44.0%	0.0%	48.2%	40.0%	45.8%	37.9%	52.5
Q9：「社会における大学や学問の位置づけについて考える」ことができましたか。	7.7%	22.0%	23.5%	20.0%	35.7%	14.3%	21.4%	0.0%	16.7%	17.9%	56.6
Q11：「高知における高知大学の存在意義について考える」ことができましたか。	23.1%	41.5%	29.4%	36.0%	45.2%	0.0%	32.1%	40.0%	54.2%	33.5%	46.3
Q13：「相手の話をよく聞き、自分の考えを分かり易く伝えるという双方向コミュニケーション能力の重要性を認識する」ことができましたか。	34.6%	46.3%	58.8%	92.0%	53.6%	28.6%	69.6%	60.0%	45.8%	54.4%	35.0
Q15：「議論の基本的な進行方法と合意形成の手法を修得することの重要性を認識する」ことができましたか。	26.9%	19.5%	23.5%	48.0%	41.7%	28.6%	35.7%	40.0%	41.7%	34.0%	28.5
Q17：「講義」では、自分自身で考えるためのきっかけ・視点・知識などを得ることができましたか。	38.5%	56.1%	52.9%	84.0%	48.8%	0.0%	50.0%	10.0%	41.7%	42.4%	58.9
Q19：講義を受けて作成した「レポート」では、講義内容を振り返るとともに、講義内容に関する自分の意見をまとめることができましたか。	11.5%	41.5%	52.9%	72.0%	51.2%	28.6%	58.9%	40.0%	54.2%	45.6%	39.0
Q21：「演習（グループワーク）」では、相手の意見に耳を傾け理解するとともに、自分の意見を相手に伝えることができましたか。	23.1%	51.2%	70.6%	84.0%	54.8%	0.0%	57.1%	50.0%	66.7%	50.8%	49.9
Q23：「プレゼンテーション」では、自分や自分のグループの意見を分かりやすく発表することができましたか。	15.4%	19.5%	35.3%	24.0%	41.7%	0.0%	19.6%	20.0%	62.5%	26.4%	67.8
Q25：あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか。	50.0%	63.4%	64.7%	80.0%	52.4%	57.1%	58.9%	40.0%	62.5%	58.8%	19.0
Q27：グループワーク等において、担当教員から適切な助言やサポートを受け、それを役立てることができましたか。	7.7%	34.1%	29.4%	32.0%	36.9%	14.3%	48.2%	40.0%	33.3%	30.7%	40.8
平均	25.5%	37.1%	41.6%	61.4%	46.2%	14.3%	46.6%	32.9%	47.0%	39.2%	35.1
変動係数（％）	54.6	39.2	38.2	40.5	16.5	124.0	32.1	54.0	28.7	47.5	65.3



図：大学基礎論の授業目標に対して、「はい」と回答した回答率（%）

今年度は全体的に回答者数の受講生に対する割合が低く（30%；昨年度 68%）、アンケートの周知という点で問題があったかもしれない。特に農林海洋科学部（3%）と医学部（9%）で低くなっている。具体的な回答と照らし合わせると、肯定的な回答に「どちらかというとはい」も含めるとその率はそれほど低くないものの、回答者数の受講生に対する割合が低い学部では「はい」のみのカウント数は低くなる傾向が見られた。このため、回答者数の受講生に対する割合が低い学部ではアンケートの有効性に支障がある可能性が考えられる。

全体を通じて各設問における「はい」という回答率（以降単に「回答率」とする）は約 39%（昨年度は約 51%）となった。図に見られるように回答率は、質問項目や学部（コード）によって比較的大きな変動がある。質問項目は、大きく分けると Q1～11 が大学や学問の意義についての学びの成果、Q13～27 が自らの学びやグループワークにおける議論や意見とりまとめについての習熟等、に 2 分できる。

回答率が高い質問項目には、上位から「Q25: あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか。」（59%；昨年度 65%で 3 位）、「Q13: 「相手の話をよく聞き、自分の考えを分かり易く伝えるという双方向コミュニケーション能力の重要性を認識する」ことができましたか。」（54%；昨年度 71%で 1 位）、「Q21: 「演習（グループワーク）」では、相手の意見に耳を傾け理解するとともに、自分の意見を相手に伝えることができましたか。」（51%；昨年度 66%で 2 位）となっており、昨年度と傾向は似ていた。回答率が低い質問項目として「Q9: 「社会における大学や学問の位置づけについて考える」ことができましたか。」（18%；昨年度 34%で最下 2 位）と「Q23: 「プレゼンテーション」では、自分や自分のグループの意見を分かりやすく発表することができましたか。」（26%；昨年度 37%で最下 3 位）があり、こちらも昨年度と大きくは変わらない傾向であった。Q9 については自由記述の回答を見ると、

学生にとって難しい課題であるためと言えそうである。Q23 についても、自由記述の回答からは、努力はしたが向上の余地はあるということで、取り組み自体に問題があるというよりは自己評価が厳しめという印象である。

学部（コード）間では、教育学部・医学部看護学科・地域共同学部の「はい」の回答率が他の学部よりも高い値を示している（それぞれ61%、47%、47%）。その理由として、具体的な回答理由の記述の中に教育学部と医学部看護学科では「教員」や「医療従事者」という言葉が、地域共同学部では地域への貢献に関する言葉が頻繁に挙げられており、1年次において卒業後の将来像や学修の目的を明確に描いている受講生が多いことが影響していると考えられた。例年は医学部医学科も高い傾向にあるが、今年度はアンケート自体の回答率が低いことが影響したためか、そうではなかった。例年、高知大学の存在意義に関する問い（Q11）では回答率が低い傾向が認められるが、今年は例年同様に低いQ9（18%）よりはやや高い値（34%）となっており、関係教員の講義における工夫等の成果と考えられる。

設問グループのうち、自らの学びやグループワークにおける議論や意見とりまとめについての習熟等に関するQ13～27については学部・学科間の差は大きくないものとみられる。ただし、アンケート自体の回答率の低さが影響していることが考えられるが、農林海洋科学部（アンケートの回答率9%）と01001人文社会科学部（アンケートの回答率25%）では他学部よりも全体的に「はい」の回答率が低くなっている。個別の回答理由についての記述からはその原因は特に探ることができなかったが、なんらかの改善の余地がある可能性は考えられる。

また年度末に、副分科会長（自己点検・自己評価部会）の三角先生（理工学部）および鈴木による令和7年度のシラバスチェック後、シラバスの修正が行われた。

3. FD 活動

本分科会の位置づけ、並びに取り組み状況を委員間で共有した。他の分科会や大学全体でのFD実施に関連する情報については担当委員内での共有を図った。

コロナ禍以来オンラインコンテンツの有効利用が進められており、オンライン授業ではライティング講座の共同実施などで成果が認められた。さらに昨年度来の経緯と成果を考慮して、moodleによるオンラインコンテンツの利用、対面でのゼミではグループワーク等を行うことで、受講生間や教員との意見・情報交換を活発に行うといった取り組みが行われた。それぞれ学部、学科、コース等の単位でFDを実施しながら、授業改善に取り組んだ。

2 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長 小野寺栄治

1. 学問基礎論分科会の運営体制

学問基礎論の主な内容と学習到達目標は以下のように設定されている。

専攻する学問の輪郭を学びます。それぞれの学部・学科で学べる専門分野や研究テーマについての知識を得て、専門教育でこれから学んでいく際の展望を持つことが目標です。このほか、文献検索の方法、学術論文の読み方、レポート作成の技術など、専門教育で必要となる基礎的な知の技法を身につけます。

この目標の達成に向けて、各学部・学科（分野、コース）において、それぞれの裁量と工夫により、授業形態や授業方法及び教員の担当方式等を決定し、2年次以降の専門科目を見据えた授業が行われた。学問基礎論分科会としては、委員や授業担当教員の間で適宜情報交換を行いながら、次年度のカリキュラム編成と自己点検評価活動を行うことを基本とした。なお、本年度の学問基礎論分科会委員は以下に示す計7名の委員で構成された。

分科会会長：小野寺栄治（理工学部）、

副分科会長（FD 部会）：中澤純治（地域協働学部）、

副分科会長（自己点検・自己評価部会）：藤田博一（医学部）、

その他の委員：田鎖数馬（人文社会科学部）、望月良親（教育学部）、
續木大介（理工学部）、松川和嗣（農林海洋科学部）

2. カリキュラム編成

カリキュラム等編成部会（第1回：7月11日、第2回：10月10日）及び共通教育実施委員会（第1回：5月31日、第2回：7月19日、第3回：11月7日）を経て、令和7年度共通教育科目の開講予定科目数が確定された後、示されたスケジュールに沿って授業題目表の作成およびシラバスの作成が進められた。

今年度から共通教育が再編された。学問基礎論については、開講予定科目数を学部毎の判断に委ねる形が維持されている。また、分科会長のみならず各学部の学務（教務）委員長に科目抛出の依頼がなされる形がとられている。

3. 自己点検評価活動

授業ごとに必要に応じて受講生アンケートを実施する等による自己点検・評価活動を実施した。それらの例を以下に挙げる。

(1) 教育学部の学問基礎論（全6クラス）では、「学修 e-ポートフォリオ」を使い、学期

末に受講者へのアンケートを実施した。

(2) 人文社会学部の学問基礎論では、以下のように実施された：

人文科学コースでは、アドバイザー教員による学生面談を実施し、学生には今年度の振り返りをおこなってもらい、次年度に向けた計画や今後何を研究していきたいのかを話してもらった。その際、Eポートフォリオも活用している。FD自体はおこなわなかったが、学生からの要望についてはコース教務委員会で共有し、次年度の大学基礎論、課題探求実践セミナー、学問基礎論等の授業構成の参考にしている。

社会科学コースでは、学問基礎論に関するアンケートと教員によるFDを行っている。基本的には学生から良かった点と改善点についてアンケートを収集し、それを基に次年度の方針を決定している。また、学生に関する情報（特にメンタル面）の共有を図り、次年度以降のゼミ科目に活かしている。

国際社会コースでは、コース教務委員会の場で何度か課題の共有と来年度以降に向けてのブレインストーミングのようなものを行った。

(3) 理工学部の情報科学科の学問基礎論では、以下のように実施された：

「これまでと同様に Moodle を使った資料提示や課題提出などを行った上で、対面授業を中心に、一部収録動画を用いた非同期オンライン授業を実施した。理解度を確認する試験を3回に分けて実施することで、学生が授業を受講する姿勢は緊張感を保つことができている。また本学科では Moodle に課題を提出していれば3回それぞれの試験の2日前に課題の解答例を閲覧できるようにしており、この方法によって、課題の取り組み状況が改善されているように感じている。」

(4) 医学部の学問基礎論では、以下のように実施された：

行動科学をテーマに授業を展開した。具体的には、脳の基本的な構造と働き、記憶、感情、学習、睡眠、行動変容、ストレス、薬物依存など、解剖学、生理学、精神医学、公衆衛生学といった学問領域を扱った。また、今年度から、医学科のIRデータを活用して、「医学科のカリキュラムにどう立ち向かうか」というタイトルで、どのようなところで躓きやすいのかなどについて考える授業も加わった。高知県立高知城歴史博物館館長による「土佐の医学史」も扱った。

カリキュラムの最後にアンケートを実施し、良かった点として、「意外と経験則としてわかっていることも、それを身体の中で起こっている反応として捉えると論理的に説明できることも多いというのが実感できてよかった。前期に朝倉で受講した科目の内容と結びつくときもあって、面白かった。」「扱う分野が純粹に面白かったです。自分たちに直接的にかかわるような内容ばかりだったので、自分事としてとらえることができました。」といった意見があった。また、改善したら良い点として、「とても分かりやすく興味を持てる講義でしたが、聞く講義という印象が強かったので、時々グループワークをしてもいいのではないかと思います。」

「この講義で学んだ内容が2年次以降どういった分野に関わってくるのか詳しく扱ってほしい。」といった意見がみられ、次年度以降の改善を検討したい。

2月下旬から3月下旬にかけて、次年度開講予定科目のシラバスの点検・修正・修正確認が行われた。学問基礎論分科会においては、点検対象となった「学問基礎論」のシラバスを副分科会長（自己点検・自己評価部会）の藤田博一先生に点検していただいた。そのご尽力に感謝したい。

4. FD 活動

それぞれが必要に応じて全学のFD・SD授業参観に参加したり、授業を担当したりすることを通じて、教育の質の改善・向上を試みることにした。分科会全体としての独自のFD企画は昨年度に引き続き行わなかった。

以上

3 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー分科会長 市川昌広

—カリキュラム編成活動—

令和 6 年度カリキュラム編成の経過

令和 6 年度より、各学部専用の科目のみ開講となった。

次年度のカリキュラム編成においても、各学部の判断に委ねる形を取っており、ほぼ、例年通りのカリキュラム編成で承認された。

—自己点検・評価活動—

課題探求実践セミナーでは、教育効果を検討することを目的として、授業評価アンケートを実施している。

学びの効果(解答のない課題について考えるなど)、教育方法(グループワークなど)、そのための教員の配慮・説明などに関して、いずれの学部においても解答はポジティブ(「はい」または「どちらかというとはい」あるいはコメントより)が大半を占めていた。コメントからも多くの学部間で共通して、課題へのアプローチ、考え方の多様性、グループワークによる気づきの有効性などがあげられ、とくにグループワークの手法としての有効性が指摘されていた。

以上のことより、授業に対する学生の満足度は高いと考えられ、課題探求・問題解決力、および協働実践力習得に向けたイントロダクションとして、課題探求実践セミナーがその役割を果たしていると考えられる。

ただし、回答率が高い学部でも 40%、多くが 20%~30%、低い学部では 10%ほどと低いため、より正確な評価をおこなうには回答率の改善を図る必要がある。

—FD 活動—

カリキュラム編成については各学部に依頼しているため当分科会における FD 活動は、委員各自の FD 参加(たとえば全学 FD フォーラムなど)を除けばとくに実施していない。

4 国際コミュニケーション科目分科会

カリキュラム：准教授 西尾美穂

自己点検・自己評価：教授 高橋 俊

FD：准教授 土屋 京子

カリキュラム

今年度で人文社会科学部所属の英語担当専任教員が3名退職し後任補充もないこともあり、授業担当体制の見直しを行った。それでも学部間での授業負担の不均衡は残る。非常勤講師の高齢化も不安材料だ。実際、来年度のカリキュラム編成作業の最終段階になって、非常勤講師1名が体調不良を理由に辞退された。教育のレベルを維持しつつ、持続可能な授業形態と授業担当体制を構築するため、オンライン化・対面授業とのハイブリッド化・外国語センターの設立・グローバル教育支援センターとの連携・選択科目化などさまざまな方策が提案された。いずれの案にも利点と課題があり、今後も検討を重ねていく必要がある。

自己点検・自己評価

共通教育外国語分科会自己点検評価部会では、1学期・2学期の期末試験終了後に受講生へのアンケートを実施し、前期は924件、後期は538件の回答があった。以下、気づいた点を列挙していく。

・2学期の回答数が前期より大幅に減った。回答数を増やすための取り組みが必要である。

・個別のコメントは、ほとんどが好意的なものであった。

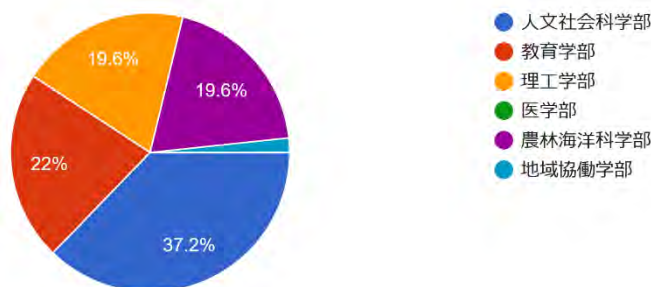
・現在、外国語部会で話題に上がっている「大学英語入門」と「外部試験導入」についても質問したが、ともに回答は割れた。さらなる検討を継続していく。

今後も継続してアンケートをとり、授業の改善に役立てていく予定である。

アンケートが大部になるため、本報告書には2学期分のみ掲載する。

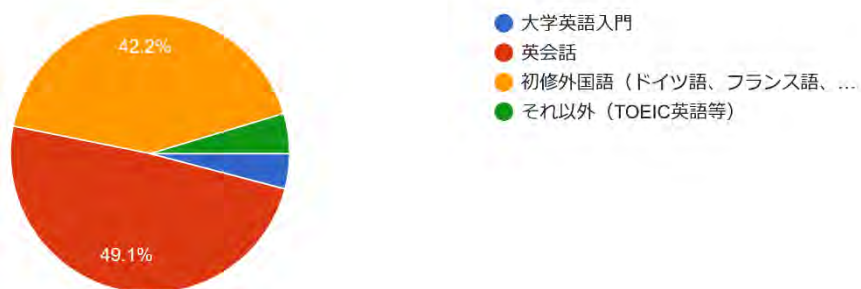
あなたの所属を下記から選んでください。

537件の回答



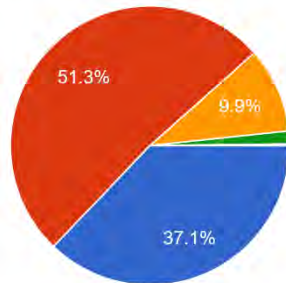
問1 あなたが受講した授業（このアンケートの対象となる授業）は次のどれですか。

538件の回答



問2 シラバスの到達目標は達成できましたか。

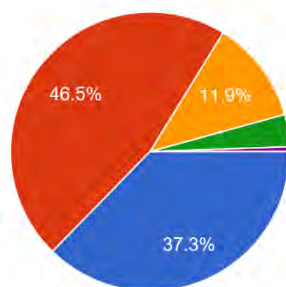
536 件の回答



- きちんと達成できた
- やや達成できた
- どちらともいえない
- あまり達成できなかった
- まったく達成できなかった

問3 シラバスは授業の履修に役に立ちましたか。

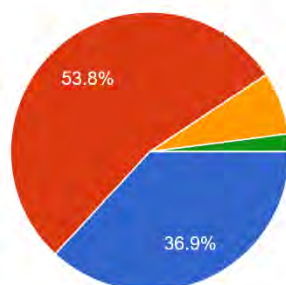
536 件の回答



- とても役に立った
- やや役に立った
- どちらともいえない
- あまり役に立たなかった
- まったく役に立たなかった

問4 授業はどのくらい理解できましたか。

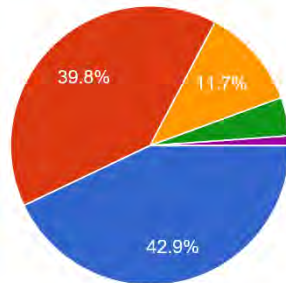
537 件の回答



- ほとんど理解できた
- おおむね理解できた
- どちらともいえない
- あまり理解できなかった
- まったく理解できなかった

問5 受講した外国語への学習意欲は高まりましたか。

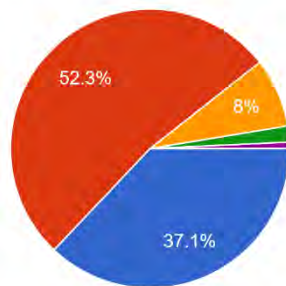
538 件の回答



- とても高まった
- やや高まった
- どちらともいえない
- あまり高まらなかった
- まったく高まらなかった

問6 授業の難易度は適切でしたか。

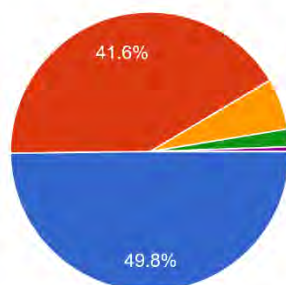
537 件の回答



- きわめて適切だった
- 適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切ではなかった
- まったく適切ではなかった

問7 この授業に満足しましたか。

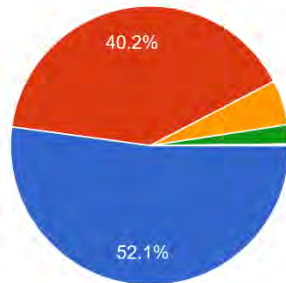
538 件の回答



- とても満足した
- おおむね満足した
- どちらともいえない
- あまり満足しなかった
- まったく満足しなかった

問8 授業の進度は適切でしたか。

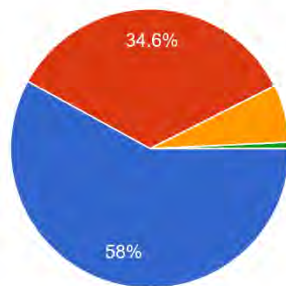
537 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問9 教科書や配布資料の使われ方は適切でしたか。

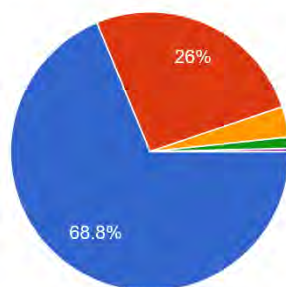
538 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問10 教員の話し方は適切でしたか。

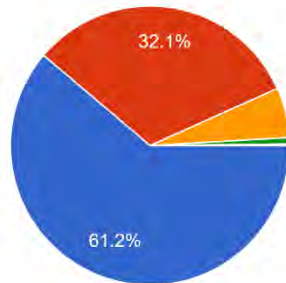
538 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問11 板書や資料提示は適切でしたか。

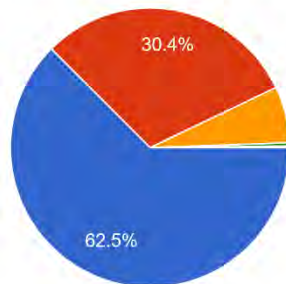
536 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問12 意見や質問への対応は適切でしたか。

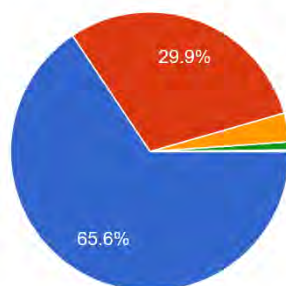
536 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問13 教員は熱意をもって授業に取り組んでいましたか。

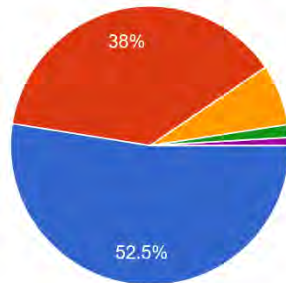
538 件の回答



- とても熱意をもっていった
- 熱意をもっていった
- どちらともいえない
- あまり熱意をもっていなかった
- まったく熱意をもっていなかった

問14 中間試験や期末試験の出題内容は適切でしたか。

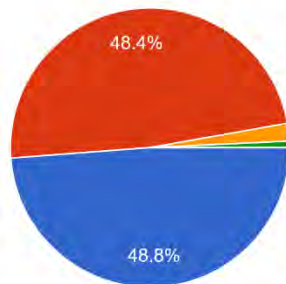
537 件の回答



- とても適切だった
- 適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切ではなかった
- まったく適切ではなかった

問15 授業にどの程度出席しましたか。

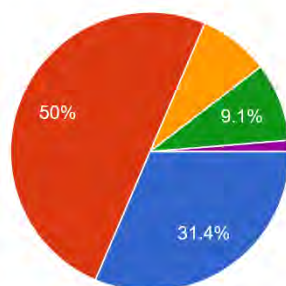
537 件の回答



- すべて出席した
- おおむね出席した
- どちらともいえない
- あまり出席しなかった
- まったく出席しなかった

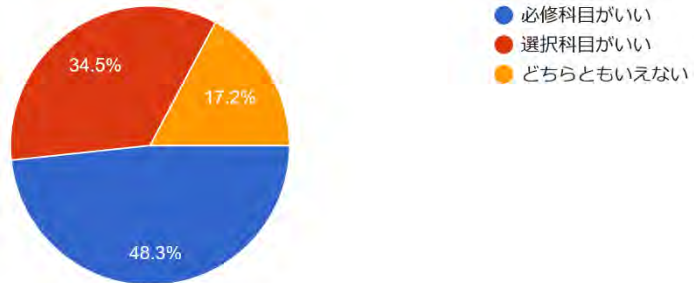
問16 受講した言語に関して自己学習（授業の予...試験準備以外の学習）をどの程度行いましたか。

538 件の回答

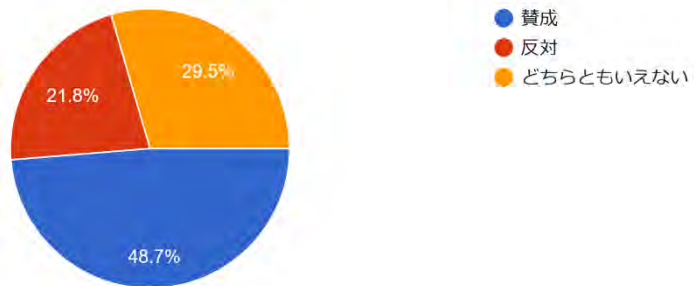


- 努力して自己学習に励んだ
- 多少自己学習に取り組んだ
- どちらともいえない
- あまり自己学習はしなかった
- まったく自己学習はしなかった

問17 「大学英語入門」についてお聞きします。...、必修と選択、どちらが望ましいと考えますか。
476 件の回答



問18 TOEIC等の外部試験についてお聞きしま...討されていますが、それについてどう考えますか。
505 件の回答



問 17 回答した授業に関する意見やコメントを自由に書いてください。

外国語に関して今後必要のない学生もいる。受けた人には補助金を出す程度でよい。

わかりやすかったです。

毎週の授業が面白く、とても楽しかった

十分に準備ができない人もいると考えられるから。

英語で会話する機会が特にないのでそのような機会が授業であるのでよかった。

授業は楽しかったがパソコンを使うことが多くて、パソコンを使用するのが好きではない私にとっては少し苦痛だった。

オンラインでしたが丁寧な先生の解説や適切な宿題で分かりやすく理解できました。ありがとうございました。

国際英語の授業を受けて、先生が楽しい雰囲気を進めてくれて授業が受けやすかったです。

英会話の講義を通じて、他コースの学生との交流ができた。発表を何度も行ったことで、緊張に打ち勝つ練習にもなった。気兼ねなく仲間と話せるよう、ゲーム形式の講義があっても面白いかもしれない。

ドイツ語はとても難しい言語だととても思った。

先生が聞き取りやすい英語で話してくれて、話している内容が理解しやすかった。

ドイツ語についてだけでなく、ドイツ語を話す国々についても学べる機会があって、外国に興味を持つきっかけになりました。せっかくここまで学習したので、これからもドイツ語に触れる時間を作りたいと思います。

楽しく学習ができて言語に興味を持つことができた。

ドイツ語の講義を受講したが、ドイツの文化や政治、時には映画など学生が興味を持つような工夫が施されていた。毎回の小テストは大変だったが、学習のモチベーション維持に繋がった。

課題が多すぎた

英会話Ⅱ、楽しかったです。

授業自体は楽しかった。

2学期のクラスの振り分け方が適切ではないと思った

本格的に英語を使った会話が展開されており、自分の意見を英語でまとめて出す課題によって、理解度も深まったと思う。

初めて中国語というものを勉強して、周りにたくさんある中国語などに関心を持つようになりました。授業自体も楽しくわかりやすい授業でした。

楽しく授業でき、自分の知識が高まって良かったです。

初めて学んだ言語だったけどこれからも学びたいと思った。

大学英語入門では、主に文法を学習した。先生の板書や授業の内容に合った資料が配布されていたため、理解しやすかった。進度については、1つの課題を長く深く探究していく形だったため、着いていきやすかった。今後、グローバル化が進むにつれ、英語などの言語は必須になってくると考えるため、この講義は必修科目が良いと考えた。

費用が余計にかさんでしまうこと

英会話では、英語を使ってコミュニケーションを取るための方法を学んできた。通年講義だったが、前期も後期も周りの友達と英語を使ってコミュニケーション取る授業が多く、積極的に取り組むことができた。また、英語でコミュニケーションを取る際には、聞く側の態度や、雰囲気大切だと言うことを学ぶことができた。

中国語は、初めて触れる言語で、他人とコミュニケーションを取ることが好きな私にとっては、とても興味のある講義だった。簡単な単語や、基礎となる文法を学び、リスニング能力などを向上させることができた。中国語でコミュニケーションを取るためには、ある程度の単語力が必要だと言うことを学んだため、これからも、中国語の単語には触れていきたいと考えた。

自発的に英語を話す環境が必修科目として設けられていたのでとてもよく感じた

中国語を履修したが始めた頃はあまり興味がなかったものの、1年間通して学習したおかげで検定にも興味を持てた

準備ができない人もいると考えられるから

普段英語を使う機会はあまりないので、英語を使う機会があるのはいいと思いました。

ラテンアメリカの食文化などを映像を通して知れたのが興味深かったです。

教育学部の人以外とも英会話で交流することができ、体験を通して英語力が少しは身についたかなと感じる。

楽しかったです

同じ授業を受講している多くの学生と英語で話しながら交流できるところが良かった。実際に英語を使って会話することで英語に親しむことはもちろん、リスニング力や英作力も身に付いた。

ドイツ語を初めて学びました。最初は全然分からなかったけど、学んでいくうちに楽しくなりました。

英語で話す場面が多くあったので、実践的な会話をする事ができて良かった。

英語で話すことは難しいことだと思ったが、コミュニケーションをとるうちに楽しさに気づきました。

実際に現地でよく使われる単語や文化を教えてくれたため、理解を深めることができた。

わかりやすい授業構成で自ら学びながら新たな知識の習得へと励むことができた。

英語を通してコミュニケーションをとることの楽しさを感じられた。

英語でコミュニケーションをとることの楽しさを感じられた。

英会話の授業の難易度が自分にちょうど良かった

とても良かったと思う

英語を話すうえで、周りの生徒と楽しく活動することで重たすぎるプレッシャーを感じずに会話を交わすことが可能になると感じた。

第二言語を学び、視野が深まり学びが非常に楽しかった。他の言語にも触れたいと思った。

中国語 I はとても楽しかったです。

前期と同じ教授の授業を受けたので、私のことを覚えていただいております

かったし、親しみやすかった。外国人の先生の授業でもあったので、発音がネイティブに近く、よかった。

ドイツ語を学ぶことで、英語の文法の理解度がさらに、上がったように感じる。また、単語も覚えられたので、これからも、ドイツ語に触れあっていたい。

先生やクラスメイトと楽しみながら英会話できたことが良かった。ただ、クラスメイトと話すときに、ただ日本語で話すだけの時間もあったので、英語だけで話さなければいけない、などのような制限をもう少しかけても良いと思った。

毎回の授業が、楽しく、英語を話す楽しさを感じる事が出来た。高校までは、リスニングやリーディングに力を入れてきたが、話すことはしてこなかったため、言葉に詰まることも最初はあるが、やはり、英語でコミュニケーションが取れると楽しくなり、以前に比べ、英語を話すことに抵抗感を感じにくくなった。

受講した言語圏の国や文化の紹介を、スライドや動画で見せてくれて、その国に旅行に行きたくなりました。

中国語の基礎知識を身に付けることができた。

楽しく英語でコミュニケーションをとることができた。

国際英語の授業、楽しかったです。

国際英語ではミケランジェロ先生だったが、先生からコミュニケーションを取ろうとしてくれてたり授業内容も面白くて、とても楽しかった。

難しかったが、楽しかった。

比較的理解しやすい英語で先生が話してくれたり、質問してくれたりして楽しかった。

[初修外国語] 教員によって、ある程度、難易度は統一してほしいと感じました。

[英会話Ⅱ] 特にありません

第1志望ではなかったですが、すごく学びになった授業でした。

楽しく授業を受けることが出来ました。

ありがとうございました。

丁寧な説明のある授業で良かったです。
ありがとうございました。

そのシステムのおかげで自発的に英語の勉強をすることが増えそうだから
英会話は他の生徒との会話が必須であるため、受講生徒をレベル別に分けて
開講するということが非常によかったと思う。そうすることで、ある程度レベル
が揃ってより鍛えやすくなる。

少し難しいと感じたが、自主的な勉強のモチベーションになるし、最終的にある
程度満足できるレベルの外国語を学ぶことができた。

専門的な言語分野をやってもいいと思う。

とにかく会話ができるようになれば英語を習う意味がない。

とても楽しく学習することができました

TOEIC 英語について

この授業は、期末テスト以外の「小テストや第 15 回に行われた確認テスト (中
間テストに当たるもの)」は自己採点を行ったあと、集めるという形式をとっ
ていました。しかし、自己採点のため「先生が答えを提示してから、書き直し
たり、書き加えたりする」生徒がいました。小テストも確認テストも成績に関
わってくるものですが、不正をする自己採点を利用し不正をする生徒が私が
見た中でも 2 人いました。そのため、このようなテストに関しても、自己採点
ではなく、担当教員が採点をすることが厳格な成績評価につながると思いま
す。ご改善よろしく願いいたします。

ただ英語を学ぶのではなく、英会話を重視した、非常に楽しいものでした。そ
のため、意欲的に学習することができ、英語学習への興味を深めることができ
ました。このような授業が増えることを切に望みます。

英語を話す機会がたくさんあって、会話力が身についた。

TOEIC だけでなく英語全般の勉強法を学ぶことができ、大変実りのある講義で
した。

非常にわかりやすく接して下さった。

先生が積極的に班活動に参加して下さったので、学習意欲の向上につな
がった。

授業でグループを作らせるのをやめてほしい。グループワークをするのなら

先生側がメンバーを決めてほしい

試験はお金がかかるので自分が受けたいと思っている学生だけでいいと思ったからです。

楽しくグループ活動しながら取り組むことができた。

難しかったが、一人一人に親切に教えてくれた。

先生がとても熱心な方で非常に有意義な学びができた一年でした

楽しく学べましたありがとうございます

大学英語入門より英会話の方が英語力の向上により繋がると感じたため、もしできるのであれば、大学英語入門の枠を英会話にして、週 2 の授業にすればよいと思う。

毎授業、楽しかったです！

中国語Ⅱは予習をしていれば難易度は適切であった。

実戦形式が多く、今後の役に立ちそうだと感じた。

楽しく英会話を学ぶことができました。

授業の内容もわかりやすくて良かったです

元々履修したかった授業が落選して代わりに履修した授業だったが、とても楽しく受講することができたのでとても満足している。

毎回授業が始まって最初の 10 分でクラスの 20 人と英語で話すという課題があったので、他の学生とたくさん交流できて楽しかった。

英語の基礎について学ぶことができ、とても良かった。

初めてドイツ語を学んだが適切な指導のおかげで興味を持って学ぶことができた。

英語を話す機会が多かったため、英会話の経験値が増えただけでなく、さらに英語が好きになった。

フランスの文化や食べ物についてより興味が湧き、これからもフランスについてよく知りたいと思った。授業を最後まで楽しめたと感じている。

英語だけでなく、世界情勢を知ることの大切さを学んだため、履修できて良かったと思う。

外国語への理解がより深まったと思います。

英会話の期末課題のディベートは、その準備をしている学生としていない学生が大きく分かれていたため、それらも含めた評価がつけられるような制度や課題提出の方法を構えてもらえると良いなと感じた。

毎回の授業の容量や説明が分かりやすかった。

黒板に書かれたものを写す学習ではなく、毎回スピーキングやリーディングを重点的に行う内容だったため、理解しやすかった。

楽しく受講することができた。

とても楽しく意欲を持って授業に取り組むことが出来た。

分かりやすく教えてくれた

課題があることで継続的に課題に取り組むことができるのと同時に、単語テストがあることで、単語の習得の重要性を知ることができた。

楽しい雰囲気の中で英会話を行なった事で意欲的に会話やグループワークに取り組む事ができた

とても分かりやすく面白い講義で、英語力も上達しました。

全体的に英会話の授業はとても楽しいものだった。スピーキング能力も上がったと思う。

毎回小テストがあったので、次の範囲を勉強する良い機会となった。また、文法内容をレポートにまとめるのが、とても良い予習となった。シャドーイングや音読もとても良い練習となった。語学はやはり繰り返し練習することが大切なので、課題やテストを課されることで、勉強せざるを得ない状況が大変有効であったと思う。

韓国語の授業では席替えをしなかったのが気になりました。隣の男性が授業中ずっと話しかけてきたことがあって正直迷惑でした。でも授業の内容はすごく良くてテストも辞書の持ち込みを許可してくださったのでとても安心して受験できました。先生の豆知識も豊富で韓国語以外に経済政治のことなどが良く分かりました。先生の言葉は厳しいことがあって少しプレッシャーになることもあったけど語彙力が上がるという点では良かったと思います。

英語に対して苦手意識があったが、英会話を受講したことで、楽しく英語を話すことができた。また、自らすすんで英語を話すことで、英語で表現する力が身についた。

私は中国語を受講したが、毎回課題が出されるため、授業時間外での学習時間を自然と確保できた。授業内では、近くの席の人と中国語で会話する時間があり、中国語を聴き、話す力も身についた。

前期、後期の英会話で自分の英語力はまだまだだと感じたので TOEIC を中心に積極的に英語に取り組んでいきたい。

英語の練習をする際、英語だけの時間と英語と日本語を混ぜていい時間があるって、英語を意識して勉強出来て、定着しやすかった。また授業終わりに先生が日常の話を聞いてくれたり、話してくれて、週 1 でも英語と触れられて良かった。

国際問題に関して、知らない事を沢山知れて嬉しかったし、それに対して思った事や考えた事を授業メンバーやレスリー先生と話せて嬉しかった。また、先生が学校で授業が出来ない際はチームズを使って代用出来ていたため、困った事も無くて助かった。

フランス語について楽しく学ぶことができた。

中国語の授業を受け、0 から学ぶということで多少の不安もあったが、分かりやすく丁寧な授業をしていただき、確実に力をつけることができたと思う。

英会話Ⅱの授業を受け、多少の不安もあったが、分かりやすく丁寧な授業をしていただき、確実に力をつけることができたと思う。

英語の四技能である「リーディング」、「リスニング」、「スピーキング」、「ライティング」をバランスよく伸ばすことができ、授業を通じて自身の英語力が格段に向上したと思われる。

以上

FD

今年度は、2024年9月10日の14時から共通教育310教室にて、FD講演会を実施した。オンライン授業が一部常態化するなかで、語学の教科書はどのように対応、変化しているかという論点をめぐり、柏倉健介講師(郁文堂取締役)を招聘し、講演「大学における語学教科書の傾向と未来」というタイトルでまずは講演を行ったが、当日は高知大学で外国語教育に携わる専任講師ならびに非常勤講師のうちで14名が出席し、質疑応答が繰り返された。その後、郁文堂の教科書・参考書を参照しながら、どのような語学授業のあり方が好ましいか、参加者全員で意見交換をした。

9月23日10時から17時までは、ドイツ政府文化機関 Goethe Institut と日本独文学会の共同主催のドイツ語教員養成課程修了者を対象とした語学教育に関する講演ならびに勉強会に分科会所属教員が参加した。たとえば時事的ニュースや漫画を教材として用いる、動画作成などを課題とするなど、参加者からも授業運営のアイデアが共有され、他の研究機関や大学で語学授業に係る研究者や教員とともに議論や情報共有をした。

2025年3月6日の14時からFDワークショップを共通教育310教室で、大学における外国語授業において非常勤講師がどのような問題を抱えているのか、あるいは非常勤講師からみた語学教育の可能性について、前田織絵講師(名古屋大学非常勤講師)をオブザーバーとして招聘し、「大学教育における非常勤講師の役割と現状」を開催した。他の授業科目のなかでも今後ますます非常勤講師への負担が増えていくと思われる語学授業において、専任との間で問題を共有する機会を作ることが重要であることが再確認された。当日は非常勤教員が7名、専任講師が6名参加した。

今後もこのようなかたちでFD講演会やワークショップを開催し、外国語関連科目の単位数の削減への対処や、授業時間外学修をどのように学生に取り組みさせるか、課題や試験のフィードバックの方法、シラバスの作成についてなどについて、さらに議論を重ねていきつつ、他大学との情報交換を行い、高知大学の教員が教授法をアップデートしていくために教員研修を行っていく必要があるだろう。

5 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会長

大塚 薫 (グローバル教育支援センター)

日本語・日本事情分科副会長 (FD 活動担当)

林 翠芳 (グローバル教育支援センター)

日本語・日本事情分科副会長 (自己点検・自己評価活動担当)

渡辺 裕美 (人文社会科学部)

<活動の概要>

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅳ」が開講されている。

ここ数年、「日本事情」科目に比べ、「日本語」科目の受講者数が少なく、受講者数の偏りが見られた。新型コロナウイルス禍を経て特別聴講学生(短期交換留学生)の受入れが2022年10月から従来通りに再開したもののコロナ禍以前の水準には戻らないこともあり受講者数が軒並み減少したが、今年度は多少持ち直している。受講生からは「日本語」科目の授業が週2回の授業で2単位が取得できるのに対し、「日本事情」は週1回の授業で2単位の取得が可能なため、単位取得に際し、日本語科目の単位取得に多くの時間を割かなければならないことが指摘され、それが「日本語」科目が受講生に敬遠される一つの要因になっているようだ。

現在、共通教育の開講科目として、日本語Ⅰ～Ⅲは演習、日本事情Ⅱ～Ⅳは講義とそれぞれ設定されており、そのためか、日本語Ⅰ～Ⅲは週2回×16週で2単位、一方、日本事情Ⅱ～Ⅳは週1回×16週で2単位として設定されている。教授内容に違いがあるものの、単位数に響くほどのものではなく、単位数の認定が受講者数のアンバランスに影響しているのではないかと考えられる。

また、従来日本語・日本事情科目は「外国人留学生及び学則第40条第2項(外国において相当の期間中等教育を受けた者)に該当する学生のための科目」として定められ、正規生のための科目として開講されていた。近年は、特別聴講学生(短期交換留学生)の受講が増加し、2020年度から3年にわたるコロナ禍においては事情が異なったが、2010年度以降は日本語科目においては非正規生の受講が受講生の8割以上を占めている場合もあった。特別聴講学生は、母国で日本語・日本文化を専門として勉強している学生であり、高度な日本語力を有している。

日本語科目において履修学生に求められている日本語力は、日本語能力試験N1レベル(上級レベル)相当の能力であり、他の外国語で定めている基準より高く設定されている。実際に、履修している外国人留学生は、正規生及び特別聴講学生ともに本学で専門科目を日本人学生とともに学習している学生であり、上級レベルの日本語力を有してい

るため、日本現地で学習するという環境に加え、週1回の授業でも十分な学習効果が期待できる。さらに、週2回の受講の縛りをなくすことにより、外国人留学生は授業の選択の自由度が増え、より多くの教員の授業を受講することが可能になると考えられる。

以上の問題点を踏まえ、外国人留学生が週1回でも日本語科目が取れるようになることは検討すべき今後の課題である。

1. カリキュラム編成

今年度も引き続き、人文社会科学部の教員は日本事情科目を、グローバル教育支援センターの教員は日本語科目を担当した。科目構成は、日本語科目については日本語教育専門のグローバル教育支援センターの専任教員1名が2019年度末で退官しその後補充がなかったため、2019年度当初から1科目減少し日本語Ⅰ～Ⅲ、日本事情科目については日本事情Ⅱ～Ⅳを実施した。

また、2024年度の開講基本コマ数、担当体制については、面談やメール等で調整を行い、担当者及び開講曜日・時限を決定した。

2. 自己点検・自己評価活動&FD活動

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケート調査を全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。また、2009年度以降は、共通教育が実施する自己点検評価活動等の実施を通して、授業の改善に努めている。

2024年度において、日本語・日本事情分科会では、日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、自己点検活動及びFD活動を連動させた活動を行っている。具体的な活動としては、日本語Ⅲの授業内で学生によるレビュー活動を実施するとともに日本語Ⅰ・Ⅲ、日本事情Ⅲ・Ⅳでは、授業終了時に独自の授業アンケートを実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。しかし、日本語・日本事情科目は全6科目を5名の教員で担当して行っている上、今回のレビュー活動並びに独自の授業アンケート調査を実施した科目は限られ、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。また、オンライン授業やアクティブラーニングに関するFD研修を個人ベースで受講し、授業のさらなる改善に努めた。

その他、自己点検・自己評価活動として2025年度の日本語・日本事情科目を担当する教員のシラバスを確認し、教育の内部質保証として学生にとってより分かりやすい内容のシラバスになるよう修正を行った。

3. その他

新たな授業の開発としては、日本語・日本事情分科会で開講している科目内で今般の多文化共生社会における最新の日本文化の理解や文部科学省の最優先課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的としたビジネス日本語教育も展開した。また、日本語Ⅰの授業内で地域に出向いて日本文化に関する体験活動を地域の住民の方々と交流しながら実施したり、日本語Ⅲの授業内で交流授業として受講生に加え学内の日本人学生と協定校の学生とピア・ラーニング活動を行うなど新たな授業方法の開発にも努めた。

2025年度以降も購入した書籍の内容を踏まえて、留学生の体験型学習や日本における就職時に必要なビジネス日本語教育、対面教育とオンライン教育を並行して実施するハイブリッド型教育を日本語・日本事情科目内で取り入れ、留学生のニーズに応じていきたいと考えている。

また、共通教育の広報誌である『PipeLine 64号』で「日本語・日本事情分科会」の概要として「日本語」科目と「日本事情」科目について具体的な授業内容や特徴的な取り組みについて紹介した。

6 医療・健康・スポーツ分科会

カリキュラム編成部会
幸 篤武（教育学部）

令和7年度カリキュラム編成

令和7年度のカリキュラム編成は、まず各科目の履修者数を確認することから始めた。その結果、科目ごとに増減はあったものの、概ね過年度と同様の履修傾向が認められた。したがって、基本方針として、令和7年度の開講コマ数は前年度（令和6年度）と同等にすることが決定された。しかし、70歳を超える非常勤講師の担当分については開講できないこととなり、朝倉1コマ、物部2コマの計3コマを削減することとなった。受講する学生に不利益が生じることを避けるため、分科会教員にも協力をお願いし、他県の大学教員からの助力を得ることができた。その結果、見込まれていた3コマの削減から、1コマの削減にとどめることができた。

課題について

カリキュラム編成において、特にスポーツ科学実技および講義については多くの苦慮があった。学内で担当可能な教員の数は増加する見込みが少ないため、これらの科目は非常勤講師に多く依存している。この状況は令和7年度以降も変わらないと考えられる。また、高知県内で非常勤講師として担当できる人材が非常に限られている現状も変わらない。さらに、現在の科目担当者の中には70歳を超える非常勤講師もあり、今後の対応が求められる。

今後は他県からの非常勤講師の採用も視野に入れる必要があるが、交通費の手当についての制約が問題視されている。この問題が解決されない場合、令和8年度以降は開講コマ数を減少させざるを得ないという認識が分科会内で共有されている。

1. 令和6年度「健康」

本年度「健康」の授業は、昨年度同様に非対面授業での開講であった。A・Dの4クラスの授業後に、履修学生を対象として1学期に授業評価アンケートを実施した。質問内容は学部、学年、性別、授業内容の評価12項目と授業による自身への影響3項目の計15項目、および自由記載である。受講者363名、回答者61名（回答率16.8%）であった。

1) 回答者の特徴

回答者の特徴を示す（右表）。回答数はクラス別にA：11名、B：3名、C：19名、D：28名であった。回答者の所属する学部はクラスにより偏りがあった。回答者は1年生が最も多く35名（57%）であった。回答者は男性：31名、女性30名で男女比はほぼ同等であった。

表 学部別・クラス別の回答者数

	A	B	C	D
総回答者数	11	3	19	28
学部				
人文	3	0	13	2
教育	0	0	0	3
理工	2	0	3	10
農	1	0	3	6
地域協働	0	0	0	0
医	5	3	0	7
TSP	0	0	0	0

2) クラス別授業評価15項目の結果

評価指標15項目の結果をクラス別に示す（下図）。項目1-12は授業内容に関する項目であり、項目1-7は教員の準備状況や取り組みに関する内容、項目8-12は学生の授業への関心や満足に関する内容である。項目A-Cは授業による学生への影響を問う内容である。

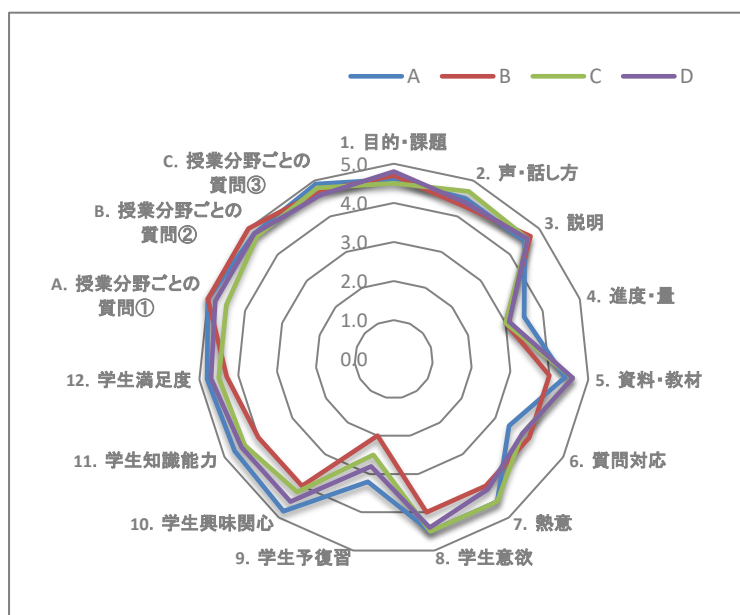


図 クラス別による授業評価 15 項目の得点結果

項目 1-12 のいずれにおいても、各クラスでの大きな隔たりはなかった。項目 1-7 の教員の取り組みは平均点が 2 項目（項目 4、項目 6）を除いて 4 点以上であり、昨年同様に高い評価であった。項目 4 の「授業の進み方や内容が適切か」と項目 6 「教員は、受講生が質問や意見を述べる機会をつくりそれらに答えているか」は、非対面授業の影響か例年評価が低い傾向であった。しかし今年度の特徴として、項目 4 は昨年よりも平均点が 0.6 ポイントと低下しているものの、項目 6 では例年よりも平均点が 0.3 ポイント上昇した。非対面授業でも教員が学生の質問に答える時間の確保をしているものとする。項目 8-12 の学生の授業への関心や満足の評価においては、学生の予習復習状況を除いて平均得点は高かった。

授業内容が学生に及ぼす影響についての質問項目 A-C は、各クラスとも例年よりも更に高い評価であった。受講生は「健康」を受講することで健康への関心や理解を深め、学生自らの健康を振り返り、今後の生活の参考にしようと考えていることが明らかとなった。本授業は健康に関する話題を各分野の講師から学び、学生が健康についての多角的な捉えや知識を得る機会であったと考える。

3) 自由記載のまとめ

自由記載への回答では、生活習慣など身近な話題に関する内容で理解がしやすく関心をもって聴くことができたようである。また精神の健康について知る機会となったこと、精神疾患が身近な疾患であることを知るきっかけとなったという回答があった。

4) まとめ

「健康」は多様な分野から講師が講義を行っており、学生の健康に対する意識を高め、健康のための予防行動や対処行動を身につけることができる貴重な時間である。大学生活を始めて健康への関心が高まっている受講生にとっては、オムニバス形式で行われる本授業は例年、受講生の関心が高い。昨年のアンケート回答者は 247 名であったが今年は回答者が極端に少なかったことから、講義内容に関心のあった受講生が回答したことも考えられる。授業評価を次年度に活用するために、アンケートによる受講生の声を積極的に集める働きかけが必要である。

医療・健康・スポーツ分科会

FD 部会

医療・健康・スポーツ分科会

副分科会長神門大輔（教育学部）

R6 年度活動計画書に沿って、FD (R6.1.16) を実施した。スポーツ科学実技で開講されているバスケットボール（幸篤武准教授）の授業を題材とし、幸篤武先生（授業担当）、宮本隆信先生、神門大輔（FD 担当）の 3 人で、ボール競技における各個人の動きやチームの戦術などのリアルタイム・フィードバックのシステム構築について検討した。

体育館に設置したカメラ（GoPro）からの映像を無線 HDMI 受信器で受信し、リアルタイムで大型モニター（55 型テレビ）に投影するシステムを利用した。これにより、受講学生の動きをより正確に確認することが可能となった。また、Teams を活用し、各学生や教員が個人のデバイス（ノート PC、タブレット、スマートフォン）で映像を確認できるようにした。さらに、Teams の会議機能を利用し、授業中の映像を録画・保存することで、時間外学習として後日映像チェックを行える仕組みを確認した。本 FD では、Teams の活用により、学生自身が個別に映像を確認し、自己分析や戦術理解の促進に繋がることが確認された。

今後は各視点からの映像を取得するためにカメラを複数台設置し、映像を切り替えられるシステムを導入することや遠隔操作によるカメラの画角調整機能を検討し、学生の動きをより詳細に分析できる環境を整備することが課題となる。これにより、プレーの全体の流れや個人の動きを多角的に分析でき、リアルタイム・フィードバックの質が向上することが期待される。

また、昨年度の報告書に記載されていた Wi-Fi の接続範囲の課題に加え、無線 HDMI 受信機の接続範囲や体育館 2 階の電源確保の問題は依然として解決しておらず、今後の改善が求められる。さらに、大型テレビの設置台数や設置場所の最適化、準備・片付けの簡便化も今後の検討課題として挙げられる。カメラの複数台設置や遠隔操作機能の導入については、次年度の課題として継続検討する。また、映像分析システムの高度化も重要であり、遠隔操作カメラの精度向上や AI による動作分析、統計データの取得の可能性を模索していく必要がある。

今回の FD 研修では、リアルタイム・フィードバックのシステム構築の可能性をさらに広げる成果を得ることができた。今後も技術的な改善を進め、授業環境のさらなる充実を目指す。

7 キャリア形成分科会

キャリア形成分科会長 齊藤 雅洋（地域協働学部）

1. キャリア形成分科会の目標

キャリア形成科目のカリキュラム編成とシラバス点検を行うことによって、学生のキャリア形成に寄与する。

2. 分科会活動の報告

(1) カリキュラム編成

11月～12月上旬にかけて、教職委員会、資格教育委員会、SUIJI推進室、**学務課全学・共通教育係**と分担し、次年度のキャリア形成科目のカリキュラム編成を実施した。授業担当教員に対する次年度開講の形態や時限・曜日等の確認作業の依頼を行い、内容に変更・修正等がないことを確認した。

(2) 自己点検・評価活動

2月下旬から3月にかけて、副分科会長（自己点検・自己評価部会）を中心にキャリア形成科目（全37科目）のシラバスの点検を行った。「シラバスチェック項目」にそって点検を行い、問題なく記入されていることを確認した。

(3) FD活動

キャリア形成分科会単独でのFDは行わず、必要に応じて関連する他分科会等のFDに参加することを基本方針とした。本年度のFDへの参加実績はなかった。

(4) その他

特になし

8 芸術分科会

令和6年度 共通教育 芸術分科会 活動報告

芸術分科会長 阿部鉄太郎（教育学部）

次年度（令和7年度）に向けたカリキュラム編成

共通教育実施委員会において、次年度の担当コマ数案が提示され、芸術分科会は計6コマ（専任教員5コマ，非常勤講師1コマ）を担当することが確認・承認された。この決定を受けて分科会を開催し，分科会内での担当教員ローテーション表に従いカリキュラム編成を行った。本分科会は「教員数の減少」という大きな問題をかねてより抱えていたものの，次年度においても高知県立美術館学芸員が無報酬（県職員の業務の一環として）で非常勤講師を担当してくださることとなり，開講科目案（授業題目表）を無事作成することができた。

カリキュラム等編成部会及び共通教育実施委員会において，上記開講科目案が承認された。その後，教育学部3号館の改修に伴う対応のため，開講時間帯の調整・変更などが年度末にかけて危惧されたが，ご担当の先生方にご協力いただきながら，無事に開講科目を確定するに至った。

今後のカリキュラム編成における課題

教員数減少による担当教員の負担について述べる。本分科会を構成する教員は教育学部の芸術系教員を中心としているが，教育学部では後任不補充による教員数減少の影響を徐々に受けている。共通教育が本年度より新体制へと移行し，ノルマ制は廃止されることとなったが，本年度のカリキュラム等編成部会で確認されたように，今後非常勤講師（謝金なし）の配置が困難な場合は，その分のコマ数を減じることを，カリキュラム等編成部会において継続的に確認する必要がある。

FD部会について（担当：高橋美樹）

【テーマ】芸術分野の講義・演習形式による授業方法の改善

芸術分野（音楽・美術）の専門は大きく実技系と論文系に分けることができる。芸術分野の専門科目（実技系）は個人指導で行うことが一般的である。しかし，共通教育では講義・演習形式の授業を求められることが多い。芸術分野の教員の中には，集団を相手に講義をする経験が浅い人もいるだろう。

そこで，今年度は「芸術分野における講義・演習形式の授業状況」のアンケート調査をおこない，調査結果の共有と紙上情報交換会を開催し，効果的な授業方法など自己の授業改善を図った。

方法は以下の通り。内容は当初の計画通りであり，アンケート調査とその集計結果の紙上での共有を中心とする活動であるため，事業経費の使用はなかった。

(1) 共通教育(芸術分野)に所属する教員にアンケート形式で実態を報告してもらう。

所属教員9名全てから回答を得た。

(2) 集計結果を後日所属教員9名と紙上で共有し、各々が今後の授業方法の改善に活用する。

アンケートの質問内容として大まかに以下の6項目を設定し(全体では8項目)、話題とした。

1. 共通教育の授業の実施形態について(講義、演習、実技)
2. 実技系教員が「講義」を含む授業形態で実施した際の困難点
3. 実技系教員が「演習」を含む授業形態で実施した際の困難点
4. ビジュアル・音響・映像資料の活用について
5. グループワークの導入の有無とその授業効果
6. 共通教育独自の授業効果

1. は講義=3人、演習=3人、実技=4人、講義と演習=1人であった。

2. は「授業の準備」が3人と多く、「講義の計画(15回分)」「教材・教具の選定・準備」「受講生の興味・関心の把握」が各1人いた。

3. は「受講生の興味・関心の把握」が1人おり、「その他」として「訪問先との日程調整」を挙げた者がいた。

4. はPC=5人、CD=2人、DVD=2人、Blu-ray=2人、「その他」として「参考作品(コピー)及びネットの素描作品を参照にした」「実物教材(モチーフ)を活用している」「音楽サブスクの音源をスピーカーで流している」との回答を得た。

5. は「グループワークを導入している」=4人、「グループワークを導入していない」=4人、「グループワークを今後導入する予定」=1人であった。グループワークの授業効果として、「受講生による音楽の嗜好や興味・関心のあるジャンル、音楽の聴き方など、個人の音楽聴取について受講生同士で情報交換し、共有することができる」「グループごとに発表させることで、授業者は当該年度の受講生の傾向を把握することができる」「学生が自ら創意工夫して表現することができるようになった」「主体性を身に付けることができる」「多様な意見に接し、議論する中で思考力を養うことができる」「参加型にすることで授業の雰囲気よくなる」「授業外学修を必ず行うことになる」「GWで情報共有することによって興味の対象が広がる」との回答があった。

6. は「履修学生の多くは授業課題に対してとても意欲的であり、質の高い作品を制作している。専門性を求められる授業(基礎から応用まで)をしっかりと熟しており、元々の素養を感じる」「芸術の面白さを色々な学生に届けることができ、普段の生活に役立ててもらえるところ」「教育学部で美術を専攻する学生も受講しており、美術ではない教育学部の学生や他学部の学生の描く作品に刺激を受けている」「完成した作品は学生全員で鑑賞を行う。ものの捉え方や考え方の違いが視覚的に伝わり、それぞれの良さを実感し共有する場を創出することができた」「専門性の違う学生たちによる音楽についての様々な視点が興味深い」「学部の枠を超えた交流で刺激し合いながら学びを深めることができる」との回答を得た。

今回のアンケートを通して、講義の実施にあたり、実技系教員は講義の計画や教材・教具の選定など授業の準備にやや困難性が見られた。さらに、受講生の興味・関心を把握することに苦心している者もいた。一方で、学部の枠を超えた共通教育の授業効果として、受講生同士が交流、刺激し合いながら授業を創造・展開できる点が明らかになった。

自己点検・自己評価部会について（担当：野角孝一）

第1回自己点検・自己評価部会で決定した点検内容を基に、以下の観点から共通教育教養科目群「芸術」（芸術分科会）のシラバスチェックを行った。

1. 対象

令和7年度の共通教育教養科目群「芸術」で開講する科目の内、常勤教員による授業は、「彫刻入門」「ガムラン演奏基礎演習」「音楽解剖学入門」「オーケストラの魅力に迫る」「初心者向け 日本画を描いてみよう」の5科目であり、これらの授業を対象にシラバスチェックを行った。

2. 方法

授業が5科目ということで他の分野と比較して少ないため、自己点検・自己評価担当者による点検を実施した。

3. 点検内容

全体的なチェック項目として必須に項目に注意事項に沿った適切な記載がなされているか確認した。また、共通教育から提供されたシラバスデータを基に「授業実施方法」「授業の目的」「授業科目の到達目標」「授業計画」「授業時間外の学習」「成績評価の基準と方法」「オフィスアワー・学生相談場所」について重点的にチェックを行った。とりわけ学生の視点に立って、具体的な記載されているかについて丁寧にチェックを行った。

4. 結果

「シラバスチェック項目」に沿って自己点検・自己評価担当者において点検を行った結果、概ね適切な内容で記載されていたが、一部、授業内容に関する記載に不十分な科目があったため、授業担当教員に修正の依頼を行った。修正を求めた具体的な内容として、「授業計画」において、各回の授業計画として全く同じ内容が重複して書かれており、受講する学生にとって分かりにくいものとなっていた。また、「オフィスアワー・学生相談場所」の記載について、学内のどの建物の何階に相談場所があるのか記載がなく、学生が相談する際、困るであろうという推測した。

5. まとめ

シラバスチェックについては学部の授業も含め3年目ということもあり、教員の意識が高く、修正の必要はほとんどない。しかし、さらに精度を上げるために、細かなところまでチェックを行った。今後もシラバスチェックを継続して行い、シラバスを実際に確認する学生からの視点を大切にしながら、その精度を高めていきたい

総括

年度始めに作成した活動計画書に概ね沿うかたちで円滑なカリキュラム編成及びFD活動・自己点検評価活動を行うことができた。今後はさらに芸術分科会としての独自性が発揮される取り組みができればと思う。本年度立ち上がった共通教育の新体制について、芸術分科会の位置づけ・役割を再確認しながら、学生及び教員の双方にとってプラスとなるような建設的な活動を目指していきたい。

9 人文科学系領域分科会

人文科学系領域分科会 カリキュラム編成に関する報告

人文科学系領域分科会長 渡邊ひとみ（人文社会科学部）

1) 次年度（令和7年度）に向けたカリキュラム編成

共通教育実施委員会において承認決定された開講科目数に基づき、本分科会内で議論した結果、人文社会科学部から11コマ、教育学部から3コマを開講する運びとなった（計14コマ；センター教員及び非常勤等を除く）。本分科会が目指す教育目標（豊かな人間性と高度な専門性を備えた人材の育成）および分野の多様性を考慮しながら開講科目の選定を行った。来年度は教員数という点でますます厳しい状況となるため、今年度と同様の開講科目数を維持する（担当者を決定する）作業は容易ではなかったが、分科会構成員である先生方からのご理解・ご協力を得ながら無事に開講科目を確定することができた。また、物部科目担当者の選定ルールを変更するなど、分科会内での担当体制を一部見直す作業も行った。

2) 今後の分科会運営の在りかたとカリキュラム編成

2-1. 分科会の運営体制の整備

本分科会では、昨年度の総括の中で、『部会（FD部会、自己点検・自己評価部会）を越えた情報の活用・応用を意識的に行うことで、様々な分析結果・知見をカリキュラム編成に活かし、さらには学生と教員の双方にとってのメリットにつなげていく必要性』を提示した。つまり、「カリキュラム編成と他部会活動との連携」という視点をもち、分科会が提供する授業内容の多様性や質の高さを維持することを目標として掲げた。

この課題・展望を踏まえ、今年度は「図書を活用した教材開発」をFD活動として設定し、教員各自が教材開発や授業内容の改善を試みた（年度末にアンケート調査も実施し、集計データの共有も行った）。1学期に開講された授業については時期的に図書購入が間に合わなかったが、次年度以降の授業内容にその効果が反映される予定である。したがって、次年度も引き続き、今回のFD活動の効果を検証し、授業改善の内容や程度をより正確に把握する必要がある。また、自己点検・自己評価部会では、授業の質保証の観点から「公正な成績評価」がなされているかどうかを分析・確認する作業を毎年行っており、今年度も客観的指標からの授業改善を実施した。このように、各部会での活動やその効果を授業改善およびカリキュラム編成に直接つなげることで、今後も効果的な分科会運営を目指す。

さらに、今年度から共通教育が新体制となり、カリキュラム編成については分科会（分科会長）に委ねられる部分が大きくなった。今後のことを考えると、分科会長が交代しても分科会の運営や維持が容易にできるよう、科目担当体制についてのルールを今一度見直し、整

えておくことが重要である。

2-2. 開講科目（数）の精査

本分科会では、「教員数減少による負担の大きさ」が深刻な問題となっており、今後も退職者による教員数減少が見込まれる。現時点で既に、分科会構成員のほぼ全員が担当コマを持っていることから、再来年度以降の開講科目数の維持は困難となる可能性が高い。今後は、履修者数の分析も行った上で、「本分科会が掲げる教育目標の達成」と「実際の教員資源とのバランス（また、そのバランスのとりかた）」について議論していく必要がある。

3) 総括

今年度から共通教育が新体制となったが、予定していた科目を無事に開講することができた。また、分科会構成員の先生方のご協力もあり、来年度（R7年度）の開講科目リスト案を作成することができた。来年度以降は、教員数と学生のニーズの双方を分析しながら開講科目を選定できるよう、早い段階から議論を始める必要がある。また、今年度実施したFD活動の効果を縦断的に検証し、今後も質の高い授業の提供を目指す。

学士課程運営委員会「公正な成績評価の実施に向けて（申合せ）」では、「優以上の成績を修める学生の比率は、半分以下を標準とする」という目安が設けられている。本報告ではそれがどの程度機能し、授業の質保証が担保されているのかという観点から現状を確認することを通じて、自己点検・評価作業を行うものである。

令和6年度における人文分野の授業は18科目であった。全学共通教育係から提供された資料をもとに確認した結果、優以上の成績を修める学生の比率が半分以上の授業は、2科目（担当者は1人）であった。すなわち全体の89%を占める16科目は申し合わせに示された目安の範囲内におさまる成績評価を行っていたことになり、このことは、先の目安がかなり有効に機能していることを示すものといえるであろう。

その上でさらに、この目安を超過した授業担当者から、その「理由」ならびにそこでの（成績評価の仕方など）質保証の「工夫」について聞き取りを行った。以下、その結果を簡単にまとめる。

〔事例〕

理由：登録した学生の大半は勉強に熱心に取り組み、それが成績に反映された。

工夫：総括的な成績評価ではなく、形成的な成績評価システムを採用している。学生は毎週課題を提出し、それに対して成績評価を行う。さらに学生は最終レポートも書かなければならない。従って、学生はコースを修了するために、比較的多くの採点付き課題をこなさなければならない。

このように、たとえ超過した授業においても、担当者は質保証のための取り組みを行っていたことが確認された。「授業の仕方を工夫して、その結果として多くの学生が高い成績をおさめる」ことは本来授業のあり方として望ましいものであろう。

令和6年度 共通教育人文科学系領域分科会 FD 活動報告

人文科学系領域副分科会長 佐竹泰和（教育学部）

コロナ禍以降、本分科会では、オンラインツールの活用などの授業改善に関する FD 活動を重ねてきた。これまでの FD 活動もあり、オンラインツールの活用について一定以上の成果をあげることができた。一方で、コロナ禍対応を優先する中で、基本である教材づくりについて活動、またその情報交換の機会を十分に設けることができなかつた。そこで令和6年度は、以下の①および②の通り、図書等の活用による教材開発と授業改善、またその工夫をアンケートにより収集し、情報交換会を実施した。

- ① 共通教育人文科学系領域分科会に関係する教員を対象に、図書等を活用した教材開発を依頼。
- ② 上記教員に対し、教材開発および授業改善に関するアンケート調査を行い、その結果を紙面にまとめてオンライン上で情報交換会を実施。

本分科会には、さまざまな分野の教員が関わっていることから、教材開発について決まった方法は設けず、図書等の資料活用を含め、各自の裁量で行うこととした。アンケートでは、教材開発とその成果（授業やシラバス改善）を中心に、主に以下の3点について尋ねた。

1. 教材の作成や図書の活用および授業活用ツールの導入など、担当した共通教育授業で工夫・活用したもの。
2. 今年度の授業開発 FD を経て、来年度のシラバス（授業の目的、到達目標、授業計画、評価方法、授業実施方法等）変更を検討しているかどうか。またその内容。
3. 今後の教材開発や授業計画について考えていること。

まず1点目の質問に対しては、オンラインツールを主体的な学びにつなげる取り組みや映像の活用による内容理解の促進が挙げられた。具体的には、「読解対象となる教材について、Web 上に公開されている電子テキストやデジタルデータの所在を紹介して、発展的な自主学習の参考とした」、「映像作品を副教材として使用した。専門的な参考文献を授業中に示した。受講者が授業内容を主体的に復習できるように、グラフを作成させる中間課題を課した」、「学生は視覚からの方が興味をもつため、一部 DVD を活用している」などである。また、デジタルツールだけでなく「原文史料を現代語訳し、学生にわかりやすくした。その史料に関して必ず質問を出して、史料の意図を学生に考えさせる授業とした」のように史資料の活用もみられた。

2点目の授業計画については、次のような回答があった。「参考図書を購入し、扱うトピックに関する知見がアップデートされたため、授業構成の変更を検討しています」、「初年次

学生にわかりやすく、また考える授業にするため」などである。ただし、授業計画等に変更予定なしという回答も一定数みられた。その理由は十分に把握できていないが、冒頭に述べたようにこれまでの FD を経て授業改善が進んでいることが理由の一つとして挙げられよう。今年度の授業担当者の回答は「変更なし」が最多だった一方、授業担当のなかった教員の回答は「少し変更」が最多だったことから、授業担当を通じて授業改善が進む、すなわち FD と授業実践の繰り返しが少なからず奏功したものと考えられる。

最後に、今後の教材開発や授業計画について考えていることを尋ねたところ、受講生の反応をみながら授業を組み立てたいという意識がみられた。具体的には、「目的や到達目標は変更の予定はないが、受講生が関心を持つ部分と習得してきた能力が変化していくことが予想されるため、次年度の反応をみながら計画の見直しをしてきたい」、「実体験のお話が聞けるように授業内容を考えたい。なるべく学生のこころを刺激できるように工夫していきたい」、「知ることと同時に、考える授業にすること」などである。このほか、シラバス自体に変更はないものの、図書を活用して授業内容を改善し、また今後も改善していきたいという回答もみられた。

以上のように、教員の専門分野が多岐にわたり、かつ授業形態もさまざまであるため、活動成果をまとめることは難しい。しかし総じていえば、この FD を通じて、学生の主体的な学びを促進するための工夫が凝らされ、アナログ／デジタル問わず教材の選定と活用に対する取り組みを分科会内で共有することができたといえる。また、ツールを活用するだけでなく、教員自身が図書等で新たな知識を獲得し、それを教材に活かそうとする動きもある。人文科学系領域分科会では今後も活発な FD 活動に取り組んでいきたい。

以上

10 生活・社会科学系領域分科会

令和6年度 生活・社会科学系領域分科会・カリキュラム編成に関する報告

分科会長
新井泰弘（人文社会科学部）

◆カリキュラム編成

カリキュラム編成の経過（令和6年10月～令和7年1月）

全開講数26コマの内訳として、人文10、教育3、地域協働13（他分野を含む）と決定した。生活・社会分野を担当する人文社会科学部（社会科学コース、国際社会コース）、教育学部、地域協働学部に次年度担当体制について依頼をし、担当者および時間割を調整・決定した。また、別途センター所属教員に次年度担当体制について依頼を行い、時間割を調整・決定して頂いた。各学部等の協力を得て多様な科目のカリキュラムを編成できた。

◆自己点検・評価活動（令和7年2月～3月）

次年度シラバスチェックを実施中である。1回目のシラバスチェックを3月上旬、2回目を3月中旬に行っている。昨年度、KULASシステムがリニューアルされたが、記載方法に関する理解が浸透してきていると想像される。引き続き、最終チェックを行い、点検結果報告書を提出予定である。（令和7年3月11日時点）

◆FD活動

令和6年度は独自のFD企画は行わず、必要に応じて他分科会などのFDに参加した。

11 自然科学系領域分科会

自然科学系領域分科会長

藤代 史（理工学部）

1. 自然科学系領域分科会の運営体制

本年度の自然科学系領域分科会の教育目標は、昨年度と同様に、「自然科学に関する基礎的な知識、方法および思考法を習得し、それらを基盤とした自発的な探求力、深い洞察力および論理的な思考力を育成する」ことである。これを実現するために、FDや自己点検評価活動とも連動して、カリキュラム等編成およびシラバスチェックを行った。なお、分科会委員への情報周知や協議・作業依頼に関しては、原則としてメール会議で実施した。

本年度の自然分野分科会は次に示す7名の委員で構成される。FD担当の分科会副会長には農林海洋学部の橋本直之委員が、自己点検評価担当の分科会副会長には教育学部の加納理成委員がそれぞれ選出された。

【自然分野分科会委員】

分科会会長：藤代史(理工学部)、分科会副会長(FD 担当)：橋本直之(農林海洋科学部)、分科会副会長(自己点検評価担当)：加納理成(教育学部)、その他の委員：伊谷行(教育学部)、関安孝(医学部)、島村智子・西尾嘉朗(農林海洋科学部)

2. 令和7年度カリキュラム等編成

令和6年度から共通教育が再編され、おおよそ下記の流れでカリキュラム編成作業を行った。第1回カリキュラム等編成部会(7月11日開催)において、“昨年度時点での令和6年度の開講予定コマ数”が確認された。その後、第3回共通教育実施委員会(11月7日開催)での報告を経て、改めて分科会に令和7年度開講科目数等を調整するよう依頼があった。このうち学部担当科目について、分科会長・副会長を通じて各学部にお問い合わせしたところ、担当教員の退職に伴う開講科目名の変更や新規科目の追加の連絡があった。また、センター等教員の担当分は学務課全学・共通教育係から授業担当者に直接確認を行っていただいた。これらにより、開講科目の内訳は、学部担当分29、センター等担当分7、知プラ科目25の計61となった。この担当体制に基づき令和7年度のカリキュラム等編成作業を開始した。各科目の担当教員・開講時限等について、学部担当科目については分科会長・副会長を通じて、センター等教員が担当する科目は全学・共通教育係から、それぞれ連絡し確認作業を行った。このようにして編成された科目は第3回カリキュラム編成部会(1月20日開催)に提出され、原案どおり承認された。その後、センター等担当分に変更があり、最終的な開講科目の内訳は、学部担当分31、センター等担当分4、知プラ科目25の計60となった。なお、本年度からの主な変更点は以下の通りである。

【新規開講】

- ・スペクトル
- ・雨粒は、なぜ競争しないのか？
- ・データ解析プログラミング入門

【廃止】

- ・地球と宇宙
- ・自然科学の歴史
- ・情報セキュリティ入門
- ・情報社会と情報技術

【科目名変更】

- ・生命の科学 → 海洋と生命の科学
- ・生活の中の植物・菌類 → 細胞構造と代謝

3. 自己点検・自己評価

内部質保証体制の構築に関連して、昨年度に引き続いてシラバスチェックを実施した。シラバスチェックは、分科会長・副会長がそれぞれの学部を担当し、本人が開講している科目については他の委員がチェックした。センター等担当分の科目については、加納委員が担当した。

4. FD 活動

自己点検・自己評価の項にあるような内部質保証体制の構築について委員間で意見交換を行った。なお、本年度は自然分野分科会として独自の FD 講演会などは開催しなかった。

5. その他

特になし。

12 複合領域分科会

複合領域分科会長 俣野秀典（地域協働学部）

—カリキュラム編成活動—

1. 複合領域について

グローバル化の進展、社会産業構造の変化、人口急減・超高齢化といった社会状況の急速な変化が進む現代社会において、単独あるいは少数の専門分野の知による課題の発見・解決がますます困難になってきている。そのような状況を受けて、特定の領域に寄っていない、従来の枠を越えた「テーマ型」「文理横断/融合型」の学びの機会として、令和6年度に新設された区分である（詳細は共通教育広報誌『PipeLine』64号を参照のこと）。

2. 令和6年度カリキュラム編成の経過

各担当者に授業実施を依頼し、以下の10題目を開講した。

現代社会の諸問題

高知の人と企業を知る

土佐の海の環境学Ⅰ：柏島の海から考える

障害者支援の理論と実践

動画作成セミナー：高知の企業の魅力を伝えよう

国際協働入門

地域防災入門

自由探求学習

学びを創る

「学問は楽しい」を実感する

3. 令和7年度への課題

担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成となるよう努力したい。

共通教育科目の「複合領域」は、令和6年度からの共通教育の再編に伴い、教養科目群の「視野を広げる科目」の中の3細目区分（人文・社会科学系領域、自然科学系領域、複合領域）の一つとして新設されました。複合領域は文理融合型科目や総合型科目など11科目から構成されています。今回はある程度の受講者数があり（19名）、アンケートの回答率が良かった（42%）、「高知の人と企業を知る」について、アンケート結果を元に分析したいと思います。

まず、「高知の人と企業を知る」の授業概要を授業シラバスより引用しますと、「高知県内で各方面にて活躍するゲストをお呼びし、話を聞き、それについてディスカッションすることで、高知を理解する」、「ゲストの想いやこれまでの経歴等、多様なキャリアがあることを理解し、自らのキャリア形成に役立てる」となっており、高知県内で活躍されている方から直接話を聞けることが授業の特色となっています。アンケート回答者の学部分布を見ると、人文社会科学部が37%、理工学部が12%、農林海洋科学部が50%となっており、文理融合型科目である特色の出た学部比率となっておりました。受講生の学年は全員1年生で、女性の比率が75%と高い傾向がありました。高知大学に入学し、高知のことを深く知りたいと考える知的好奇心の高い女子学生に関心が高いことが伺えます。

本授業ではお招きした外部講師の方のお話を聞き、他の受講生とディスカッションすることになっており、それに関連した質問（「グループでの活動で全員の合意や全員参加を常に意識できるようになるために効果があったか」、「グループの中でメンバーの考えや気持ちを察しながら発言・行動できるようになるために効果があったか」、「自分のものとは異なる考え方や価値観を受け入れることも、自分やグループの成果に結びつくことがあるということが理解できるようになるために効果があったか」など）は全員肯定的な回答となっていました。

一方、課題探求的な質問（「問題の本質を問うことの意味を理解できるようになるために効果があったか」、「起こった出来事や発見した課題、現状を客観的に理解し説明できるようになるために効果があったか」、「授業時間外に学習・活動することの意味を理解できるようになるために効果があったか」など）では、消極的な回答（「どちらともいえない」、「どちらかというといいえ」、「いいえ」）をする学生も散見されました。今回のアンケート回答者は全員1年生であることを考えると、まだそうしたことに不慣れであるものと思われます。

授業における教員の役割に関する質問では、「教員は受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思うか」、「教員は受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思うか」についてはほぼ全員が肯定的な回答であったのに対し、「教員は受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思うか」、「授業をより良くするための試みをしていると思うか」という質問に対しては、消極的な回答（「どちらともいえない」、「どちらかというといいえ」）も見られました。この理由として、「主に授業をするのは企業の方であるため、教員がど

のような努力をしていたかは分からないから」とのコメントがあったことから、教員の対応について本質的な不満があるわけではないものの、本授業のような外部講師が担当するような講義では、質問の仕方を工夫した方が良いものと考えられます。

総評としての質問（「総合的に考えて、満足がいくものだと思うか」）では、回答者のほぼ全員が「はい」と答えており、回答理由として「この授業を通して、様々な企業の存在を知り、視点が広がったと思うから」、「さまざまな分野に興味を持つことや、グループワークを通じて自分にはない考えを得る事ができ、考え方が柔軟になったから」との意見があり、受講生にとって、「視野を広げる科目」の「複合領域」になっていることが伺えました。

以上、「複合領域」に分類される授業の一例を挙げて分析しましたが、その他の科目についても、受講者数は少なめなもの（10～40名程度）、多くの授業で人文社会科学部、教育学部、理工学部、農林海洋科学部といった学生が混在して受講しており、「複合領域」に相応しい授業ラインナップになっているものと思われます。また、多くの授業で専門家による講義、体験型学習、実習やグループワークを取り入れており、受講生にとっても評判が良いことから、この形式を維持するとともに、今後、さらなる拡充が望まれます。

FD 関連のイベントへの参加はあまり多くはないが、担当者それぞれが自身の授業で「授業改善アクションプラン」に取り組んでいる。なお、「スチューデント・フィードバック」の本年度の実施は確認されていない。

今年度の活動計画に記載されていた以下の4項目については、項目1・3・4への参加が確認された。春季FDセミナーとして実施される「ファシリテーション研修」は、複合領域科目や課題探求実践セミナーをはじめとしたアクティブ・ラーニング系科目における教育力向上を意図されており、担当者の参加が少数にとどまっていることは課題といえる。

また、今年度はグループワークに関する外部研修へ参加し、指示の出し方や内容の伝え方について学ぶ機会となった。その情報共有も含めた「意見交換会（新区分としての複合領域に関する検討会）」も実施し、その内容（在り方や特徴について）は共通教育広報誌『PipeLine』64号に纏められている。

当初想定していたセミナーの他に、大学授業入門（4月開催）・グループワークのはじめ方（4・10月開催）・秋季FDセミナー（9月開催）・新任教員のためのリフレクションセミナー（2月開催）への参加もあった。

1. 複合領域分科会または担当者間の意見交換
2. SPOD フォーラム（8月開催）への参加 ← 台風により中止
3. 全学FDフォーラム（11月開催）への参加
4. グループワークに関連する外部研修への参加

複合領域の多くの科目は、教員が教え込む授業ではなくグループワーク型の授業であることから、OJT-FD教員の参加および受け入れが最も有効なFD活動の一つであると考えられる。今年度は「学びを創る」にOJT-FD教員2名の参加があったことは成果である。来年度も引き続き、「自由探求学習」「学びを創る」などの授業への受け入れを通して、学生の変容とファシリテーターとしての教員の役割を体感・体得できるように取り組んでいきたい。また、「グループワークのはじめ方」「グループワークのためのファシリテーション入門」への参加呼びかけを行いたい。

令和6年度のFD活動のうち、複合領域 担当者（令和6もしくは7年度担当）が参加した代表的なものは以下のとおりであった。

4月	大学授業入門	1名
9月	秋季FDセミナー	2名
	学生の学びを支援する授業準備ワークショップ	2名
2月	全学FDフォーラム	7名
2月	リフレクションセミナー	1名
	グループワークのためのファシリテーション入門	1名
前期・後期	グループワークのはじめ方	2名